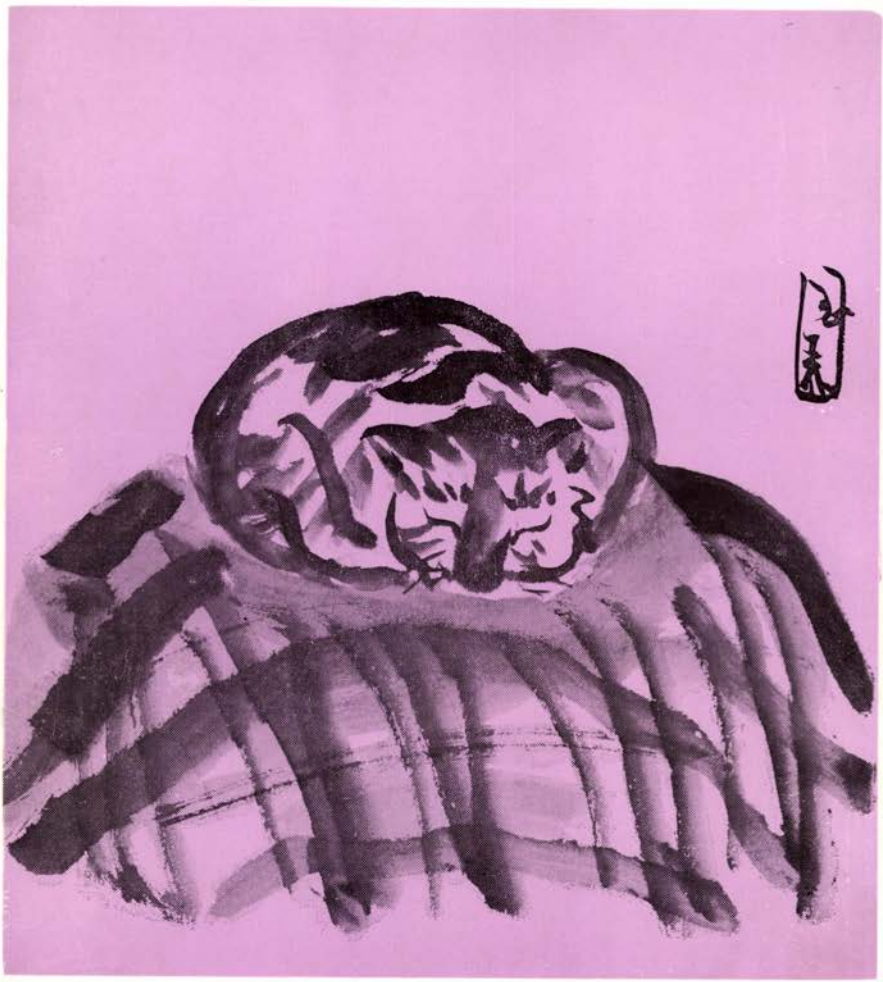
川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十五年十一月二十五日　印刷
昭和四十五年十二月一日発行　（毎月一日発行）
（第六十三号）



No. 63

45年度秀句抄

十二月号

えらばれ
みがきぬかれた　灘の酒
超特撰　日本盛

超特撰　（化粧ケース入）
一、八リットル詰・一、四一〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘　西宮酒造　醸

料理も電話も　551　ここがいちばん
TEL（641）551-2

広東料理・焼餃子
豚饅　蓬莱　焼売
大阪なんば
◆出張販売店◆
なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

逆らわず傘をしぼめてぬれてゆく

米寿ですドイツ語まじえた話好き

望みなきにあらず秘書へ念を押し

土の香もいとしくゼニもほしいなり

訂正をして失言をダブらせる

中島生々庵

農協さん

十月十、十一日の連休を得て墓参のため故郷の佐賀に帰った。ふと車中で佐賀新聞に川柳問答始末という日曜随想が目についた。県の文化会議と教委の主催になる文学賞が先月末発表されその授賞式が行なわれる事になった。ところで川柳部門の第一席「農協に叱られそうな米の出来」という菖蒲正明氏の句に対し農協中央会から物言いがつき「農協の役目を勘違いしている。社会的に衝撃を与えるような作品を入選させるのは大いに困る」という。私は月極め購読をしているこの新聞を大阪に帰ってから調べてみた。選者の言い分、作者の感想の記事がのっていてそれに対する川柳問答始末である。「文学的価値は高く評価するが、誤解の恐れがある事を指摘した。新聞の記事はオーバーです」とその随筆の中で農協会副会長は書いている。忌憚なく言って社会的に大衝撃を与える程の優秀句でもなく普通の時事吟であるに過ぎない。農協さんが兎角話題になっている折柄思い上り気味の頭上にこの位の風刺は当然すぎる川柳的使命でさえある。

座右の句

春の草代議士などに踏まれるな　（路　郎）

私の句

手弁当できて正論を譲らない

野田素身郎

川柳塔十二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

農協さん……中島生々庵…（1）

川柳塔…（同人作品）……中島生々庵選…（4）

句碑の句のこと……浜田久米雄…（2）

川傍柳初篇研究…（八十九）……（18）

前田喜代人・岡崎　重義・清
川端　柳風・故高須唖三味・丸　博美・藤井　和雄
十府・岡田　甫

「旅人」以後の麻生路郎作品…（5）……（28）

鶏と蒙古風……東野大八…（38）

近作柳樽……北川春巣選…（30）

…（同人吟）……菊沢小松園…（42）

秀句鑑賞…（近作柳樽）……西尾栞…（43）

九輪抄……清水白柳選…（40）

病院から……橘高薫風…（39）

句碑の句のこと

浜田久米雄

還暦を記念して句碑を建てる気持は何年か前から持ちつづけて来た。その還暦がことし来てしまったのである。刻む句は二、三候補に上げられていたが後世に残る句となるとそう簡単にはきめられない。句は私なりにいのちある句でなければならない。会う人ごとにこの計画を話し、約束して来ただけに必ず建てなくてはならない。一応柳友の意見を聞いて「凡人へもったいなくも湯があふれ」の句にきめていた。

けれども私の内心は凡人以上の句を望んでいた。この句は昭和二十五年「川雑岡山」十一月号に載せられた雑吟であり句集「凡人」を三十八年に出していることでもあるし、もっと新しい句がほしかったのである。ことしになって私は作句意欲をたぎらせて例会に大会にそして川柳塔誌に苦吟を重ねて来た。が私の思うような句、石に刻む句は生まれなかった。九月下句に建てる計画は変えられないから「凡人」の句を一昨年求めていた石の大きさに二、三度書いて見た。みんなも私の句碑の句は決まったものと思っていたに違いない。

求句境……戸田古方……(44)
清水白柳氏急逝……中島生々庵……(26)
45年度秀句抄……(22)
生々庵・春巣・栞・好郎・多久志・水客・古方・薫風・白柳
凡俗な……高鷲亜鈍……(19)
近詠……諸家……(19)
今どのあたり白柳さん……不二田一三夫……(27)
雅号ぶっちゃけばなし……今西章雅……(63)
初歩教室……本田恵二朗……(50)
大萬川柳「曲線」……清水白柳選……(52)
川柳横丁不二田一三夫(47)：福浦勝晴(46)：本田恵二朗(51)：阿万万的……(51)
柳界展望……(薫風)……(54)
本社十一月句会……(庸佑)……(56)
各地柳壇……(文秋)……(60)
「人妻」……小浜牧人選……(48)
一路集「口笛」……山田季賛選……(48)
「ピエロ」……渡辺暁童選……(49)
編集後記……(一三夫・葉子)……(65)

座右の句

煌々とすしがぎょうさん売れのこり　（豆秋）

私の句

俗に謂う何々のうちに吾れもおり

有信　新之助

ところがである。九月六日朝早く川柳塔社から届いた速達には「握手した」の句が本年度路郎賞に決定されたと書かれてあった。いつの句かと探して見ると本年七月号の川柳塔のうちの一句であったのである。早速柳友に相談したり考えたりした結果「凡人」の句をやめて「握手」の句を句碑に刻む方が新しくてよいではないか、という事になってしまった。川柳を作る人には、よく解ってもらえるし、川柳を作らない人に見られても理解してもらえるような気がしたからである。路郎賞の発表がもう一カ月遅れていたらおそらく凡人の句碑が建っていたのに間違いはないが、九月六日に知らされ、九月二十八日に字を刻む仕事が完成し、十月九日に土台が出来上った、かくしてこのタイミングの良さは十月十四日大安の日に宿願の句碑が建立したのである。

中島生々庵選

制約があるから人が人であり
空瓶は只ですビールは値上げです
盗泉の水をがぶがぶ飲む時世
ふところが判れば心ぶらおかしかろ
不景気と云うに求人花ざかり

堺市　吉田圭井堂

又一つあくびをすてて一人ぼち
秋の冷え受話器の中へ軽い咳
白壁の影もビッコの歩をはこぶ
原色を溶いて絵筆に秋の色
青空が少しのぞいて日曜日

広島県　高橋鬼焼

強いのへ天候までが味方する
倒産にもきれいなのと汚いの
恥かいて来いと新参励まされ

大阪市　大坂形水

口銭を不労所得のように言い
隣室は今頃バスを使う音

島根県　小砂白汀

見さかいもなくカマキリカッとなり
どんぐりコロコロ一人で生きることに決め
消しゴムの方から鉛筆先にちび
死してなお鮎の肢体にある気品
受けて立つ時は声さえドスが利き

青森県　工藤甲吉

あれもこれも世のきびしさに覚悟する
栄転へ左遷が事務を引き継ぎし
ごろ寝していても一日三度食い
会者常離しきり薄気味悪くなり
金持ちが相手で困るのし袋

高槻市　傍島静馬

アルバムに老少不定見る思い

まだ死ぬ気ないが身辺整理する
割勘が来るとは知らぬ低姿勢
誰がために深山白百合粧える
校歌とはころっと変った川の色

大阪市　金井文秋

老いて行く自分に軽く鞭をあて
可愛さの意地悪もしておじいちゃん
自分から選んだ道に愚痴が出る
　妻の病後
自信ないからだに夢も遠ざかり
本物でない体調に汗にじむ

岡山県　浜田久米雄

路郎師の顔が浮かんで楯を受く
いのちある限りいのちの句へ挑み
よろこびの手がよろこびの握手する
槌音はわたしの句碑を刻む音
赤飯がふっくら炊けて句碑が建ち

岡山県　直原七面山

派手であろうと思い出の帯
夫の嘘にも馴れて四十
過去みな捨てて香を焚く尼
スカットお別れしようと女
見向きもされぬ冬の満月

大阪市　本多柳志

笛吹いて踊らす気なり金を出し
輸血する如く重役天下り
海も川も汚してGNP三位
連休のプランへ父は疎外され
服更えて忘れて居らぬ赤い羽根

西宮市　若林草右

診て貰うにもやれアイシャドウつけまつげ
天気予報信じて蚯蚓ひからびる
扇風機とめて風鈴の窓をあけ
半分の言葉で夫婦用がたせ
台風へ鬼瓦まず落ちて見せ

美禰市　安平次弘道

公害の柳へみの虫があわて
どの子にもうつして妻の風邪なおる
過労と知ってて働らかねば食えず
保険満期損したよう気にもなり
腹割って話し善人損をする

竹原市　山内静水

美わしきかな栄光の日の同伴（国鉄三十年勤続受賞）
五等身なれどよりそう妻のいて
嫁迎う十坪へ妻と引く図面
食卓へ肘つき妻の酔かげん
生きのびてカマキリ交通事故にあい

大阪市　正本水客

秋は山から降りてきて野を歩く
頂上の風が息切れ吸い込んだ

素うどんでいいと女は反発す
よっぽどのこと独りで飲んでくる
敗北の髪洗うとき男の手
出雲市　尼　緑之助

老一人朝を掃いてる広い庭
穂芒をけとばしマイカーカーブ
明朗君へ（一句）
還暦へそうかと明日はまだ続く
真上から月　銀の池金の花
つぼ焼がにおいよろめく児と共に
豊中市　戸田古方

夢おかし子があり孫がありながら
だんだんに悲劇番組見とうなし
ガイドブックランプの宿がまだあった
温泉のない旅たまにええやろが
阿呆の研究トコトンやってみとうなり
倉敷市　本田恵二朗

父の日に買うてもろうたトースター
頑迷と固陋が碁盤にらみ合い
退職を惜しまれ婚約よろこばれ
妻君がとったトロフイばかりなり
年輪はかくせず上座に据えられる
大阪市　山川阿茶

菊日和まとまりそうな見合の座
こおろぎよもうお別れだ秋深し

Cmのぬけ道あるとは知らなんだ
敬老会一番派手な服でゆく
ありがとう一つ云えない保健証
大阪市　川口弘生

柳友田中多幸氏の死
又一つ気弱くなって棺送る
柳友行有氏母堂の死
喜寿米寿それでも香の煙哀し
三十年振りの同窓会（二句）
それぞれの鍋それぞれの味で煮え
出籠の一つに腹がつん出て来
一階に住んで団地の庭も掃き
倉吉市　奥谷弘朗

女房の憩いの一つ婦人会
自分から中古を意識する哀れ
断絶のような気になる子の別居
生甲斐の見えた自分を嬉しがり
町政も花町長の名で通り
東大阪市　久米奈良子

愛の限界おどり場へ佇ちつくす
方便の嘘はわずかに許される
迫りくる持病なだめて筆に生き
ひとり旅細道なれど夢がありさて名前何にしょうかと猫に聞き
出雲市　原　独仙

残り蚊が病後の血とは知らず吸い
スタミナをつけるホルモン焼きで下痢
また今朝もボインに押され満員車
その先を早く知りたいのに吃り
ゴキブリは逃がし茶碗を二つ割り
諫早市　川岡霊眼子

病床日記

早五カ月流石まばらの見舞客
十月が来た蒲団の厚み知り
死病との闘病生きにし人の話聴く
脳卒中知名病じゃとからかわれ
病床へ都市三十年の招待状
竹原市　小島蘭幸

人生に疲れたなどとまだ十九
馬鹿な女で俺から去ってゆく
女ごころコンピューターを困らせる
おじいちゃんの気性を知っていてねだり
商談成立対等に笑い合い
和歌山市　垂井葵水

呼鈴を待たせ履物片付ける
名作も読めぬ国語を習ろており
風雪に耐えて記念碑忘れられ
一段落ついて朝刊から拡げ
奈良市　宮口笛生

菊ほめて出来損ないをもろうて来
雨天決行まともに降られたり
長うない母の仕草へ目をそらす
管理者試験合格
転勤も覚悟の上のコース踏む
宇部市　平田実男

さて寄附となると友好的でなし
ワンマンの電話云うだけ云うて切り
鑞少し減した似顔で喜こばれ
赤い羽根よけて曲ったとこへも居
熊本県　有働芳仙

もつれた糸を笑顔で解く愛
祝盃が恩讐を越えた目をみつけ
あてのない道だが道のありはあり
泣き顔にも笑くぼが浮かぶ悲しいね
岡山県　大森娯句楽

杣響く霧の中なる木引き唄
久し振りの話に釣瓶落しの陽
身の誇り勿体振って貧に生き
勤労へ感謝の稲穂首を垂れ
八尾市　香川酔々

ブレーキへ犬は轢かれたように啼き
鈴虫へ遠慮しながらけらは鳴き
こおろぎのシュプレヒマール造成地
みそぎする流れに冷えているビール
守口市　羽原静歩

コンコースからふるさとの訛り聞く
公害が忍者のように攻めて来る
自転車の老いがペダルを踏みはずし
腕角力にっこり父が負けている

岡山県　出原敬一

感づいてからの化粧は派手になり
兄よりも良いと出来ぬ子励まされ
鉢巻が来て活気づく屋台店

十月四日末弟結婚

亡き父母に見せたい今日の晴姿

大阪市　有信新之助

どうせ間違い電話やろう午前二時
どうやら俺が先に死ねそう妻の艶
ゴムの木は小さすぎても売れのこり
秋風が身にしむようなひまが欲し

大阪市　神谷凡九郎

その口へかぶせて見たいものがある
ともかくも自分の足で来た道さ
山彦と遊ぶ大声をあげて見る
時間切れと云うような死だった

大阪市　木村水洞

残業の汗をねぎらう秋の風
秋晴へこきつかわれる洗濯機
石段を駈けてのぼった過去もあり
朝顔も枯れてそろそろ冬仕度

伊丹市　小川静観堂

十四日から千里ケ丘は秋に入り

想像の跡地（一句）

パビリオンの跡へ筍によきによきと
破る児が居るので障子そのまんま
四阿の野点まがいの熱玉露

今治市　越智一水

さりげない母のあくびへ長い夜
怒るからよけいわからぬようになり
司会者がうまく歌って次が出ず
秋咲いて朝顔の花見はなされ

大阪市　宮尾あいき

カーステレオの唄にすすきの穂もそよぐ
ゴキブリが命拾うた御仏前
だまされてあさりバケツで舌を出す
車どいたら駐車禁止の文字が見え

吹田市　岡田某人

花の夢に悔いなかりしやかえりみて
秋の花のイメージ朱色の画を描かむ
秋白く活け造りの鯛の腹寒し
はやい話がと相手はお茶をのみ

岡山市　光好陽子

うしろ指さされぬ暮し胸をはり
老いらくの恋マシユロのような味
うるさいと孫からまでもうとまれる
がむしゃらに働き女を忘れてた

松江市　小林孤呂二

短調になってこおろぎ死を悟り
ニコヨンもう過去のものにされ忘れられ
砂丘に風が鳴る海の色は冬
埋立てへ魚族逃げて行く海があり

京都府　大鶴喜由

生存競走の激しさ母もこきつかい
そうでしたかいなと嘘をつく女
老妻のたまには飲んで来いと云う
進学を母ははげます花を入れ

大阪市　西出一栄

満月を明治の夫婦だけで賞で
チクロ入れてませんと饅頭味うすし
付添と波長の合わぬ佗しさよ
子に孫にソロソロやっとく生き形身

松江市　中川晃男

キッチンへソッと来て鳴く秋の虫
過疎の村残った親も息切れし
良心を落としたのも分らぬ惰性
人生のいま生きている美しさ

神戸市　小浜牧人

係長部下を庇うて出世せず
だしぬけに紹介されて母あわて
評論家さて結論は逃げるなり
エリートは親の光へ意地を張り

八尾市　高杉鬼遊

因襲の鎖たちきる斧さがす
売り食いの身をぼんぼんと呼んでくれ
何をするつもりか月の石盗む
内股に歩むマキシが不貞なる

松江市　吉岡遁児

しゃくし定規のその直線がうとまれる
他人様の目にふれてから恋進み
一茶ならどう詠む蛙の交通禍
なけなしを果いて買ったのが盗られ

出雲市　弘津柳慶

夕焼へ過疎は静かな風が鳴り
ナツメロのテレビ父へ切り替える
好奇心をそそり叩き売りはり上げる
伝説を半ば信じて拝観し

大阪市　児島与呂志

また留守にされて素直にメモを読み
世話やきのぐちはフラフラで済み
ぎりぎりの線は守っているふたり
男信じて女の美しさ

高槻市　福田丁路

幽霊が戸惑う墓の近代化
抱いた児に寝られて喘ぐハイキング
そんな事無い筈があり倒産し
金は貸します利子はタップリ貰います

倉敷市　野田素身郎

冗談ということにして引き下り
コーヒーの味はわからず通いつめ
鍵っ子が今日も残った遊園地
折れる気でいるのに駄目を押しにくる

倉敷市　小幡里風

咲き誇る苑の心は偽れず
ネクタイの結び目今日を負けてくる
一文字に口を結んだ中の嘘
マンションの三階呼び出すクラクション

門真市　福島鉄児

大声で喋る受話器を持ち直し
見舞客途切れ退院日も迫り
話すことなくて夫婦に長い夜
話せばわかる話がこじれさせ

高知市　川竹松風

介抱もここから先はうたがわれ
控え目に話せば相手にもされず
寝返りを打てば骨が一つ鳴り
独身と言うふれ込みのニューフェース

米子市　八木千代

真価認められて敬遠されはじめ
即発をかわすゆとりも出来申し
電話鳴る今は娘の時間帯
逢うまでがいっそ愉しい髪を梳き

大阪市　中川滋雀

彼岸会へ縁無き衆生の群となり
花道を去るD51の黒光り
隣りまで伸びて糸瓜は秋と知り
二人三脚照る日曇る日まだ続く

平田市　久家代仕男

手術室出ればなまこのような妻
被災地の稲は素藁を刈る如し
溜息は籾半分が塵に飛び
売れぬ米ばかり見る日の目が疲れ

兵庫市　大江秋月

三カ月見ぬまに孫が歩き出し

日曜の朝寝を犬がさしとかず
老眼鏡ですかと嫌なことを聞く
ニュースありてホームの夕刊売りきれる

下関市　桜川不水

老婆ひとりとりとめもなく端ぎれ継ぐ
生きる虫死ぬ虫ここも会者定離
無縁仏誰が供えたか彼岸花
恋文の一こま日記の栞にし

神戸市　仲どんたく

贅肉をラッシュの電車で揉みほぐす
見納めとマキシーはやる頃のミニ
定年の主待ってる菊　万年青

薬師寺にて

雨漏りへ月光菩薩のにが笑い

愛媛県　村上旭童

おしまいにバーも見学して帰り
お祭がくるので百姓忙しい

K氏定年（一句）

定年へ蜜柑畑が待っている
秋の蚊もやはり生き抜く血を求め

小松市　浅野芳朗

終電が出たので乞食やおら起ち
見込みあるらしい進物預かられ
ゴミ捨場と知らずにカボチャ実を結び
感傷の秋白菊を嗅いで見る

京都市　松川杜的

〃しなの〃の旅から

陰陽石まつって湯の街悪びれず
霧晴れて処処白樺のあった道
サルビアの赤さが残る山の駅
肉身なれば意外に明るい雨の墓地

松江市　柳楽鶴丸

試験管ベビーでもと子なし妻あわれ
まないたのリズム音痴な夫の腕
床の間は未生玄関は池の坊
涙っていいもの嬉しい日の涙

京都市　都倉求芽

信じてはいない口止め念を押し
安堵した途端に標準語がくずれ
少々お待ち下さい三分間が切れ
酒が出てからは下座がリードする

東大阪市　竹中綾女

平安神宮の庭を拝見して

見えるとこだけはお庭も手入れされ
臥竜橋渡るに下駄を脱ぐ始末
平安宮朱塗鮮かに雨上る

裏庭の羊歯のびのびと葉を広げ

東大阪市　竹中肖二

公害の河を夕焼け紅く染め
天高し小さな庭へ小鳥来る
木犀のはかなさ三日馨るだけ
商売の慣習と云い袖の下

鳥取県　清水一保

公用と云う日の靴は音がさえ
事務的に飲み事務的に今日も酔い
風鈴へ秋風ためらっては呉れず
ライバルも矢張り天を信じ切り

奈良県　草深酔升

年金の余生へ値上げ又値上げ
秋の雨善男善女慌てさせ
買い物に行く顔をして職探し
湯豆腐へ猫舌独りもてあまし

東京都　増田次章

スモッグの空で見つけた昼の月
どなりつけ車死の影見せて去る
ネオンの点滅傷心をなぐさめる
気にかかる予感身辺整理する

岡山県　横山一声

頭張りをつけるお酒で寝てしまい
恐しい罪を犯した夢がさめ
盆栽の枯れたも公害のせいにする
共稼ぎためてるように人が云い

堺市　藤井一二三

千里の道のその一歩から行き詰まり
子沢山の子が養老院へ遣ると決め
賽銭をはずめば鈴も派手に鳴り
親善使節浴衣になって灘を褒め

鳥取県　堀江正朗

石段の一つひとつに年を知り
働いてくれる手だものいとう朝
始めから無理な手さぐりして悔いる
働いた金の重さがみじめなり

倉敷市　小野克枝

欲捨てた筈ショーウインドー眩し
叫びたいだろうに麻痺の子は笑い
転ぶことさえも女と云う不便
おとこ程働く妻のこにくらし

大阪市　太田良子

赤い服着るのに言いわけ要るも年
むなしさをまぎらす酒の量がふえ
病人の神経にふれまいとする微笑
上向いて歩けば空が話しかけ

尼崎市　高津徹也

冬蝶の高きに舞いて故郷を発つ
文化の日受勲の家の朝となり
童謡をうたい障子貼りすすむ
月の道村境まで来し所

岡山市　川端柳子

表札に頼りのうても男の名
イヤリングぶらぶら夢を追うてます
結ばれた枝のみくじも春を待つ
ころがっていた倖わせを今見付け

和歌山市　西尾公作

思い出の恋の栞りの周遊券
記念日を忘れ晩酌減らされる
指切りをした指痛むふるさとよ
出来すぎた妻にすまない窮屈さ

米子市　林瑞枝

事故寸前逃れて無神論ゆらぐ
夫にまだ隠し置きたい白髪抜く
じゃんけんで負けプロレスでレース編む

大阪市　市場没食子

万博の後片づけを見に廻り
学閥のまだ厳として聴診器
言い分は判るが内ゲバ頂けず

藤井寺市　西いわを

物言うていても好く人好かぬ人
月中天高圧線にさえぎられ
毎日を通うていても気がつかず

桜井市　岩本雀踊子

美しくやつれて孫を見せにくる
次女がまだいるから泣かぬ妻と見た
十二時に追われて箸をとる無職

奈良県　石倉旅風

こおろぎが詩の片言を繰り返えす
亡妻に逢いにゆく日の酒を飲み
好きだった方の服着て三回忌

札幌市　平野青夜

ビルの灯にシルエット浮く原田甲斐
伊達兵部疑似倒産を計画し
知らぬが仏一等米の古米喰い

島根県　藤井明朗

未定にしといて時をかせぐ策
まだ未定なのにうれしい祝い客
終列車車掌もあくびうつされる

尼崎市　長谷川三司

コバルトの放射もぬくいと感ずる日
傷跡を見たい男の姫かがみ

退院の嬉しいしらせは飲酒許可

小松市　四方天弘美

世話好きにされて家計にひびを入れ
敗けたから反省会にして飲む気
ついている今日一日の晴れだった

高槻市　山田季賛

内職が出来る身分をうらやまれ
金は無くとも温泉街をする散歩
土地感が無いから時間おしまない

倉敷市　竹内翁童

実状を知らぬ強さの体あたり
手のうちをさらけ出している自信
容姿端麗の文字も消えてる求人難

大阪市　室谷徹舟

お茶漬けをかき込んで出る妻の留守
一と言で云えばと話未だ続き
豊作の谷間見下す石仏

大阪市　飛田好一

断酒会に入会して

根性で止めて見せると酒を断ち
酒断った事を土産の郷帰え
酒捨てた夫へ妻の薄化粧

岡山県　坂井三葉

明日があるから定年の職さがし
新居にはゴルフネットもある構図
人生五十そろそろ冬眠したくなり

大阪市　福井野迷路

万物に法則人にだけ運勢
真実を述べたら税吏顔を上げ
見栄棄てた強みだバタ屋濶歩する

笠岡市　出原真奇

生のあっけなさを知る事故現場
又枯らす花だが一鉢買って来る
雑念があるから釘が又曲り

兵庫県　河原みのる

神さまも豊年祭りへほっとかれ
弔辞ではあれほど惜しんでもう忘れ
甲斐性もなくかき遺す恥もなく

大阪市　今西章雅

小猫あげます捨てるにしのびず書いて貼り
固い事云うがと譲らぬ腹を見せ
たかくくって居たが六法精通し

小松市　馬場魚山

職につく老後素直にものが言え
手を抜いた証拠廊下に雨がもり
スケッチへコスモス西の風まとも

松江市　岡崎祥月

まん丸い月追っかける夜の巡視
孫の知恵大人のような口をきき
計画をたてて実行出来ぬ家

倉敷市　水粉千翁

ある時を話す間もなく夫婦老い
雲流る秋の深さへ人を恋う
淡彩の風情は濡れたまま乾き

大阪市　河井庸佑

道ばたの名の知らぬ草花をつけ
定年へさあ天下るとこさがし
勝手なこと頼みよるなと神思う

大阪市　天正千梢

健康にたよれぬ不安つきまとい
病気のおかげ自分を静観し
子なき初老たっぷり甘えさせ

大阪市　吉岡美房

何言うていやはりますねと言うただけ
酔うて寝て父の祭はおわりけり
ロングラン昭和元禄猿芝居

愛媛県　渡辺暁童

新辞典ああ僕にいる文字がない
子に珠数をもたせて若い未亡人
手に腰に肩にお年の無理が出る

倉敷市　藤井春日

後進に道を開けば喰えぬ椅子
昇進の道をふさいだマイペース
老令の年金辞退する身分

芦屋市　丸川初甫

一生をウエディングドレスの娘にかける
思い出の歌声歌手もファンも老け
表彰あり自殺あり敬老の日

姫路市　隠岐不酔

不渡と知らず受取書いて行き
茶友達などと白髪のてれ隠し
銀行屋おしそうに言うて貸し渋り

西宮市　島居百酒

同窓のまたも減ったを遠く聞き
何度目の最後へ最後とまた送り
猫好きじゃないのに仔猫また居つき

岸和田市　葛城伊三郎

用もない車欲しがる胚かじり
一つ覚えご指名で踊らされ
辞儀一つ云わぬ事故場の黒眼鏡

守口市　村田瓢太

戸締りも頼むと出先から電話

焼香へ遅々たり夏のモーニング
万博もすんで跡地に虫すだく
岡山県　池田古心

働けど働けどしまりの無い財布
掘り下げたばかりに悪人にされ
一言が多くて前言無駄になり
奈良県　西辻竹青

万博でぞろぞろぞろの人を見た
素人目に大病だとすぐ判り
愛犬ロッキーの死
後始末チャントしてロッキーは逝き
鳥取県　森田布堂

うちの猫に産ませた憎い猫を追い
合併の校舎も過疎になる悩み
豪雪に歩行者天国とは嬉し
富田林市　岩田美代

ふり向かぬ人見送って秋に佇つ
来世はこう咲してほしと言う構図
神経を細かくすれば誤解され
大阪市　宮地双楽

身だしなみ過剰おしゃれに顔そむけ
歳費返上と一人ぐらいないものか
病床で何思うてかメモをかき
姫路市　村上春巳

飛火野が暮れるとき鹿が鳴く
カナリヤがまだ独身の声で鳴き
大塩天満宮
獅子七つ若さを競う大太鼓
笠岡市　松本忠三

気兼ねなく洗濯物が干せて過疎
玉砂利に無念無想の歩を運び
給料の控除金まで妻質し
堺市　新谷笑痴

五年振り帰省を詫びた墓碑の草
波の音そうだ田舎の朝だった
納得をさせた心にある不安
貝塚市　野坂つき子

スパルタがすぎて甘えぬ子に育ち
ジーパンをはいて日曜多忙なる
奥さんに間違えられて鏡見る
竹原市　時広一路

何色に染まるか一丁やってみる
結局は巻かれるほかにない抵抗
酒さめるまでの気炎を聞いてあげ
和歌山市　野村太茂津

墓洗う心も清く澄むも秋

酒好きのお先祖様へ酒を酌む
元旦の誓いを墓前で思い出し
八代市　永松道雄

トボトボと都会離るる退職者
借金を背負い自慢のカラーテレビ
木犀の香りになごむ縁に座し
大阪市　西川誓二

陋屋も菊一輪で秋らしく
素うどんに老舗の面目かけた味
美人かと応接室へ招いてる
下関市　志賀木石

弥次馬の中の一人が俺だった
はばからず妻の手を引く石廊崎
お目当ての富士が見えない雨の五湖
竹原市　森井菁居

身構えて蟹は無力を噛み締める
咲き急ぐ薔薇に誤算の雨つづく
もう少し居りたい音で柿が落ち
倉敷市　松下梁水

義理という壁が道理を進ませず
結局は元の二人になって老い
恋人の電話をビジネスらしく受け
和歌山市　土谷城石

急停車させて恋猫怒ってる
漫画手に鼾漏れだす待合所
天高く立体交差の快スリル
鳥取県　谷無閑

おかめ面の二号の方へいりびたり
平凡な顔を十人並と褒め
生きて居る証拠年金取りに行き
堺市　伏見茂美

情熱を秘めて五十路の恋心
ままごとへ犬もお客の数に入れ
秋の野にきびしい色は彼岸花
鳥取県　川崎秋女

公害を他人事ときくいい生活
ポスターの美女あざ笑う待ちぼうけ
へそくりも足して娘とゆく京の旅
八尾市　古川鶴声

今日だけは人に塗られる華燭の日
三代目のれんの重さ支えかね
唐津市　新岡回天子

預金帳まだ蓄えがある楽隠居
山峡へ明日の記念日晴れと見る
東大阪市　桑原喜風

もと兵士その面影もない姿勢

女房だけ恐い夜道の千鳥足

自選

大阪市　橘高薫風

入院や　わが来し方の土埃
浩然と漢詩読みおり手術前

高槻市　若柳潮花

部屋見舞小紋のついが似合うひと
空即是色おんな写経の筆を噛み
面影と歩けばしろい星あかり
曼珠沙華ことしも一人おくる野辺

名古屋市　吉田水車

空気さえままならぬ世に老い果てて
公害ならまた公害で儲けて居
昭和元禄兇器が走る
何となく二階というは落ち着かず

大阪市　不二田一三夫

骨揚げが調理師だった箸さばき
子に盗られこんどは孫が妻を盗る

寄席（二句）

夫婦漫才それでも上手に浮気する
芸人にきけば汚たない世界です

★

北川春巣

菊人形頭をカラにする気で来
石仏と対話に来れば人の列
通勤車窓も師走の曇りよう
新聞に物価上らぬ日とてなし
池の坊ですかと知ったかぶりに訊き

西尾栞

祝久米雄氏受賞

久米人の握手の詩のあたたかき
花いっぱい運動の東伯町にて
大山は今日もくっきり花の町
菊の奴菊の主となりにけり

菊沢小松園

黒眼鏡少年Aにしておかず
法律に詳しく冷たい言葉尻
一匹狼妻子を恋うる齢となり
テレビ切ってやっと我が家を取り戻す
どの虫もみんな鳴いてるように見え

若本多久志

ゆうべナアと妻に話せぬ夢をみる
下心少しはあって他人の世話
寒肥の用意来年も生きてる気
新幹線一緒に走る昼の月
襟足がキリッと女過去を秘め

近詠

須坂市　**高峰柳児**

言い訳の電話も落目見せている
よく喋るのか濡れ衣を着せられる
晴耕雨読余生も几帳面
はったりをのぞかせ時の人ポーズ
団体へ読経そそくさ終るなり

大洲市　**米沢暁明**

宍道湖は静か静かに舟すべる
ＰＴＡ土地の相場も聞いてくる
スタミナを残し悠々テープ切る
蒸タオル当てても床屋話しかけ
乾盃へ力はいらぬ紙コップ
釈明をせずに手酌で飲み続け
燃えて来ずさりとて消えぬものを抱き

和歌山市　**秋月宏方**

十二月凡人ここに来てあわて
貸おしめ母乳も知らず育てられ
ピンボケも旅の思い出貼っておき
旦さんと呼んで貰った旅の宿

岐阜市　**市川鱗魚**

みやげ付き入山料も歩るくだけ
庭プーム分にすぎたはほめにくし
過去の絵となる故郷もダムの底

今治市　**月原宵明**

いい声が出そう写楽の長いあご
当るなら易者入れたい捜査陣
一向に釣れず魚の国も過疎
家で先ず嫌われ出した父の位置

小松市　**山上千太郎**

昼めしもすんでひる寝の時間です
生きてゆくことの利害が叛き出し
乗り合いバス祭りに負けて道をかえ
白髪貧相写真をきらう老いのせい
オンボロ家に明り窓など要らず
妻子とも詩の非情を怨む
寄り縋るのを振りきって詩鬼と化す
一票でよい真実扶けてくれるなら
牡丹のかげで毛虫がひそみ
天井を睨みつけても雨は漏れ
飲まず食わずで腹は空っぽ
ショベルを入れて自分の土を掘りおこす
原始の頃にもどる穴居
眼は前だけさ耳は両横

凡俗な

高鷲亜鈍

凡俗な男凡俗なめくらになった余生
信心に凝れば夢は邪悪に反動化
毛沢東もぼくも死んだら神仏
永い永い旅路だったごっとんと停車
死眼でも生きたいための色目なり
生死不明でいる無価値
超然とみせてはいるがひがんでるのだ
シャッターの音でインタビュー了り
羽田発の金婚旅行に夢を賭け
歯には歯を目には目にをとは云えぬ僕
六十にして母の乳房にすがりたい
見えずともミニスタイル気にかかる
性こりもせず自費出版にぜにも無く
遠くから見てくらそうよ銀の月
憶い出の人葬めいている盆の月
禅問答狐につままれけりけろ

〝川傍柳〟初篇研究

（八十九）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須唖三味
清　博美丸　十府
藤井和雄　岡田　甫

648　木の鯉ハ本所木の鯛日本橋　一　甫

岡崎＝「木の鯉は本所」というのは「木でしたを見て来生きたを料らせる」（二三・23）の例句もある向島の弘福禅寺の食堂の軒下に掛けて、一山の僧侶に食事の時を知らせた魚板。「木魚ハ禅家ニ掛ケテ之ヲ撃ツ其ノ魚、鯉形ニ似ル」（和漢三才図会）とあって、鯉の形をとっていた。しかし「木の鯛日本橋」は「木ぞうの塩鯛もある日本橋」（明六智4）の鯉であろうが、具体的にはわからない。「やねの鯉こだこだと御講過ぎ」（天五仁2）の句もある。

前田＝賛。どちらも魚板。説明的で得るところがない句。

清＝「木の鯛日本橋」がわからない。日本橋には魚市があったが、これとは関係あるまい。

藤井＝岡崎さんの努力には敬服。やはり、「木ぞうの塩鯛もある日本橋」が、わからないときめ手がない。

高須＝どちらも看板と思う。当時の本所と日本橋に、そういう有名なカッポウ店でもあったか・丸・岡田先生いかが？

丸＝礎稿例句まで示して下さったのに解せず。岡田先生にお願いします。はじめ恵比須屋呉服店の看板かと思っていたが、例句によりこの不可たるを知りました。

岡田＝向島の木の鯉は礎稿通り、お寺の魚板。日本橋の木の鯛は「木ぞうの木の鯛」の例句もあるように贈物用の鯛の箱詰の木製のサンプルが、日本橋の魚河岸の魚問屋に飾ってあったのであろうと考えている。

649　**やす〳〵と三人に成る恥しさ**　五　扇

清＝畜生腹を詠んだ句。

両方へ抱いて飲ませる恥しさ　傍一15
恥しさどれが兄やら弟やら　傍一17
産婦へは隠して壱人里へ遣り　傍一33

など、すでに句解は十分いき届いたと思う

藤井＝「やすやすと」で恥かしさを強くしている。これではまるで犬猫のようだとの自戒。

高須＝「すでに句解十分」とは言えぬ「やすやすと三人に成る」は①先に子供が二人ある所へ一人生まれたのか②一人ある所へ双生子が生まれたのか③一ぺんに三ツ子が生まれたのか、この三つの場合が判然としないのではないか。①なら年子々々で三人になったことだって考えられる②でも年子で十一カ月目に二タ子を生んだ場合も考えられる。

前田＝「三人になる」は母親ともに三人になるで双生子説をとる。

岡崎＝産んだのは双子説に賛。

丸＝双生子説賛。「やすやすと」には藤井説のような含みがある。

岡田＝「やすやすと二つ身になる……」など、母親を入れて述べるのが昔の通例。だから双生児を産んだのである。

650　**焼筆を弐本火鉢へ付て出し　弔　弓**

清＝焼筆は柳などの木の端を焼いて下絵などを書くのに用いる筆。火鉢に火を入

れたが火箸がないので、よんどころなく食事用の木のはしを利用する。この食事用の木のはしを焼筆に見立てて詠んでいるところがこの句のミソであろう。

藤井＝賛。我々学生の下宿時代もよく焼箸だった。それもたいていちんばの箸だった。

高須＝代用の木箸を「焼筆」と洒落れたのが「つけて出し」で可笑しみとなっている句で「焼筆がぶっこんである安火鉢」では説明で面白くないのである。この句面白し

丸＝賛。

岡田＝同。来客に火箸もない火鉢を出す。肩もすぼまる貧乏暮らしの光景。

651　**師走の小をよろこんで叱られる**　　一　甫

清＝師走が小の月であれば、正月が一日早く訪れる。子供やひまな人にとっては、うれしいことだろうが、一般の人々にとっては、それどころではないあわただしさである。いろいろな行事や新年を迎える仕度を整え、最後に掛取りに対する金の工面をして年は暮れる。

　数へ日は親のと子のは大違い　　七・19
　十二月人を叱るに日を数へ　　四・6

藤井＝賛。陰暦だった江戸時代は師走にも小の月はあった。

川端＝賛。師走も終りに近いだけに、ことさらあわただしい日となっている。

高須＝師走にも小の月があった――というだけの句。現代の我々には？だが、それをよろこんだ人種もあった（あえて子供達ばかりとはいえぬ）わけである。

丸＝賛。

岡田＝現金払いが主になった戦後の生活とはちがい、払いをのばしてあったものも、盆・暮の節季ではどうしても支払わねばならぬ。現代人には想像以上に昔は切実だった。それだけに十二月が小であれば、一日だけ金策の日数がへる。師走の小を喜ぶのを叱るユエン。

652　**豆をいり〳〵ぶっかけさ〳〵**　　一　甫

清＝豆をいっているのは節分の豆か。豆をいりながら、夜鷹そばでも買っているのだろうか。

藤井＝豆をいりいりは「節分」か「やいとぎょう」かよくわからぬが、「やいとぎょう」とすると、豆いりも灸（二月二日）信濃者帰国ぶっかけそばと連想して二月二日、信濃者が帰国の日、おりからのやいとぎょうの灸の豆をいりながら最後の食事の注文に「ぶっかけさ、ぶっかけさ」と云ってるのではかなろうか。参考句として、

　しょうばんに信濃も三里すえて立ち　　安五桜4
　豆いりをかみ〳〵信濃いとま乞ひ　　四7
　泣き出すを聞いて信濃はいとま乞ひ　　一・37
　はやいこと信濃がのぼり立てて行き　　一四・41

川端＝「豆をいり〳〵」は・豆いり（菓子の一種）を作るのに忙がしいので「ぶっかけでいいよ」と面倒くさそうに言っているのではないか。

高須＝柳雨翁も「三月節句」で片づけているが、藤井説および引用句を見て・二月の末に三月節句の準備をしている「厨房の忙がしさ」と見てよいのではないか。現代では「豆いり」など出来ているのをデパートから買って来てすませるが、当時はすべて自家製であったろうから、事前の厨房はかなり忙がしかったものと思われる。

前田＝川端説に賛。もっとくわしくいうと豆いりをしながら（腹がへってきたので）いそがしくて飯どころではない、「ぶっかけだ、ぶっかけだ」といったところである

丸＝同。

岡田＝小生は藤井説の灸饗説に賛。但し二月二日に限らず、毎月の灸をすえる時でよろし。この時は何か御馳走をするのが決まりだった。豆いりを特に出すのは、灸の効果によろしという説があるからだが、熱い灸を我慢して歯を喰いしばるのに、噛むものが有効だからである。ブッカケは現代のカケそばのこと。灸をすえたあとに灸饗といって、灸をすえた人に御馳走を出すのがむかしの習慣。それに「何を食べる」ときくと「ブッカケそばだ」と即座に答えたというのである。

45年度

岡山県　浜田久米雄

握手した手が離れないまま坐り

倉敷市　野田素身郎

冷戦中なのに仲人頼まれる　◎

大阪市　有信新之助

ふところの金がいや味な口をきき　◎

堺市　藤井一二三

横に這う蟹宿命に逆らわず

大阪市　天正千梢

うっとりとする愛があり無一文

大阪市　福井野迷路

野良犬の誇り鎖の音がない

奈良県　石倉旅風

酔うているうちは人生悟り切り

大阪市　室谷鉄舟

聖人のような妻なり息づまる

尼崎市　高津徹也

もやしさえ力一杯生きている

今治市　越智一水

父の墓洗えば洗うほど淋し

倉敷市　小野克枝

寄りそうてすべて納得したい妻

豊中市　戸田古方

平凡な今日も一期に一会の日

大阪市　羽原静歩

七人の敵を逃れて冷奴

選考委員（順不同）

中島生々庵　若本多久志
北川春巣　正本水客
西尾栞　戸田古方
川村好郎　橘高薫風
清水白柳

岡山市　川端柳子

和解した番茶つなぎの音を立て

大阪市　不二田一三夫

風を追え風をつかみに行け子らよ

京都府　大鶴喜由

上位下位二人がそれでいいのなら

大阪市　中川滋雀

ふり向いてみても足音だけの僕

倉敷市　本田恵二朗

わが腰と相談してみて溝をとび

岡山県　荻野鮫虎狼

本当の涙は腹の中へ落ち

倉敷市　小野克枝

ためらいもなく一本の矢に射られ

大阪市　西出一栄

胡瓜と茄子どっさり漬けて心満つ

竹原市　小島蘭幸

たまに逢えば時計ばっかり見てる恋

大阪市　吉田圭井堂

安うりはせぬが長女は厄近し

小松市　四方天弘実

古美術にされて仏飯忘れられ

竹原市　森井菁居

日めくりの早さを倖せとも思い

岸和田市　内藤きさ子

今日もまたひとこと多き悔に寝る

岡山県　浜田久米雄

せめて世を美しく見るカラーにし

広島県　岩谷二三枝

鍛きて炎えてはならぬ人といる

東大阪市　久米奈良子

絃の悲しさ風が来てかきならす

米子市　八木千代

さりげなく客を送って揉め直し

和歌山市　垂井葵水

お喋べりがすめば自分を知るだろう

岡山県　浜野奇童

力一杯笑顔を見せているベッド

竹原市　森井菁居

水すまし池の深さをまだ知らず

大阪市　不二田一三夫

人間をみんな数字ではじき出し

米子市　林瑞枝

合槌のうっかり打てぬ愚痴なるか

雛子でも入れたい子子の宙返り　下関市　桜川不水

三日三晩啼いてこの家の猫となり　鳥取県　川崎秋女

一本ももつれず百足急いでる　大阪市　室谷鉄舟

仏が淋しがるからも一つ泊らされ　笠岡市　出原真奇

噛めば蜜したたりそうな耳たぶよ　大阪府　谷垣史好

構えれば蠅もキリリと身構える　島根県　小砂白汀

筆不精みこして電話かけてくる　京都市　都倉求芽

こおろぎよ何うろたえてわが膝に　大阪市　山川阿茶

倖せが逃げそう指輪まわる夜　堺市　高橋千万子

ここに来て胎児のごとき祈りあり　大阪市　橘高薫風

（広島）

石段の中途で鐘に追いぬかれ　大阪市　本多柳志

湖に向って蝶の身ごしらえ　大阪市　香川酔々

倖せな女にふだん着が似合う　大阪市　小出智子

老夫婦縦に並ぶ歩乱さない　大阪市　河野君子

金魚すれちがう互いに目もくれず◎　竹原市　岡元春昇

傷心を雨の夜景にふりおとす　和歌山市　中筋朋子

風の音風の中なる男親　竹原市　三宅不朽

或る瞬間愛も打算の翳を持つ　大阪市　黒田真砂

母の日へ風吹き抜ける子なき妻　島根県　榊原秀子

それからの心がゆらぐめぐり逢い　姫路市　前田芙巳代

逆らえば雨はわたしにだけはげし　竹原市　生信笑子

大阪市　小谷葉子

地に還る花弁に満ちるもの見たり
東大阪市　宮西弥生

幸福が待ってる手相抱いて寝る
守口市　岡原達代

人だかりのぞく時には腰がのび
島根県　小砂白汀

近よるものすべて疑う栗のイガ
堺市　羽田一扇

うんち今日も出ずラッシュの人となる
竹原市　脇本政己

白砂青松コーラのビンが破れている
今治市　原田輝親

俺でなきゃつかぬライター俺のもの
大阪市　斉藤三十四

庭の槙おむつの竿で御免ね
神戸市　来住タカ子

枯葉ばかり集まって日溜りの平和
島根県　中島英子

体臭に馴れて白衣の職に生き
大阪市　本間満津子

季節もの季節に喰べて有難し
大阪府　小川耕人

亡き人に嫌い抜かれた通夜の客
新潟県　高野不二

親もいるだろうにキックボクシング
和歌山市　仮家和美

こおろぎよ今日の時計も打ち終る
仏ヶ浦　今治市　原田輝親

群像の作者鬼神の外に無し
岡山県　目賀芳月

戒名はどえらい人のように見え
島根県　堀江芳子

よき人にめぐり会えたりペンを持つ
八幡浜市　別宮すき

二十年続く賀状のみあたらず
松江市　村松酔歩

姐らず妻は夫婦の詩を綴り
神戸市　来住タカ子

思慕の風スイースイーと蝶を乗せ

（小谷葉子　整理）

〔註　◎印は二点句、太字は各選考委員の推選句〕

柳白釈

清水白柳氏急逝

昭和四十五年十一月十二日
午前十時十五分

弔辞

中島生々庵

謹んで川柳塔社一同に代わりまして、編集部長清水白柳さんの霊前に、悲しいお別れの言葉を申しあげたいと思います。

しかし、こみあげてくる胸の痛みに頭が乱れている私には、あなたに献げる言葉を知りません。あなたの急逝をきいて、私たちが周章狼狽したか、どのくらい悲しみのどん底にたたき落とされたかお察しください。

昨日（十二日）の朝、あなたが病気再発のため夜中入院され、引きつづき危篤状態に陥ちいられているとの悲報が家族の方からお知らせいただき、ついで間髪を入れないように北川春巣院長から十時十五分ダメだった、との悲痛な言葉。突如として聞えてくる夢のような電話を誰がそのまま受けとることができたでしょうか。

さびしい現実であったのです。目の前が真っくらになって、受話器をおいた私は、しばらくなすこともなく茫然自失。

やがて、これではならぬと、自分で自分に言いきかせ、副理事長をはじめ幹部同人に連絡、急遽近距離在住の常任理事を召集し、それぞれ手配を相談し、社の内外関係者にお知らせ申しあげたのです。

その編集部の大混雑も一応終って、夜分になると今まで冷たく張りつめた頭の中が再び煮えかえってきて、あなたを連れ去った病魔が心から憎くらしく、ややともすれば理性を失いかけるほど怒りに燃え立ってくるのです最後まで残った栞、小松園、形水、一三夫らという人たちと、互いに支えあって悲しさと寂しさに辛ろうじて耐えることができました。

どうして私たちを残してあなただけ雲の峯へ旅立ってしまわれたか、しかもあなたの袖を引きとめる一瞬の時間さえ与えることなくアッという間に昇天してしまったあなたにおうらみ申しあげたい愚痴さえ出るのです。

どうしてもお引きとめすることが叶わぬとあれば、せめてほんの一ときでもいろいろお尋ねしたり、ご相談したりすることが山ほどあったのです。それはあなたが一番よく知っているはずではありませんか。

今頃は路郎先生の膝元でつもるお話でもなさっていられると思いますが、

顧みてみますと、明治三十六年石川県小松市にお生れになったあなたが「川柳雑誌」の同人となられたのは昭和十二年でありますがそれより数年も前から同志と共に、「川柳若葉」「川柳国」等の結社を持たれて川柳の道にお進みになり、昭和四十年十月、路郎先生

逝きあとの「川柳塔」創設には率先、中心的有力者となってご活躍、現在に至って居られますところのあなたは、正に全国川柳界にとっても大先輩として貴重な存在であったのであります。ましてや、昨今ようやく順調な歩みを歩み出した川柳塔としては将来をあなたに期待する事がきわめて大きくあなたなくてはの現在であります。

また、あなたご自分もやや身辺の整理もできかけて句集刊行のお心組みがあったことも承っていますし、きっと路郎先生もあなたの急逝を悲しく思っていられるだろうと想像しております。

なぜもう十年、いや五年でよい、できぬなら一年でもよい、お待ちできなかったのですか。これが人の世の悲情なのだと言って終えば、今さらのように人世朝露の如しという言葉が身にしみてきます。

あなたに残された私たちは今まであまりにもあなたに頼り過ぎ甘え過ぎていたことを昨晩もおそくまで編集部で反省したことですが、同時にこれからはあなたの川柳たましいや、あなたの自己犠牲に徹したご気性を充分私たちの進むべき道しるべとして、今までに百倍する努力精進することを誓いました。

どうぞ路郎先生とご一緒に至らざるところはきびしくお叱りください。そして従前通り暖かくお導きくださいますようお願い申しあげます。

最後にあなたの数かぎりない秀句の中から次の一句を読みあげて悲しい悲しいお別れの言葉といたします。

春々遅々として仁王さん眠くなり　白柳

11月1日、堺古刹開遊吟行妙国寺前、前列左故人最後の写真、一人おいて主幹。

今どのあたり　白柳さん

不二田一三夫

十一月十二日の午後、川柳塔の二本の電話がフルに動いた。ダイヤルを回わす。受話器を握る、正味五時間、葉子さんと僕はコマ鼠のように走りまわった。

告別式は自宅で十三日午後三時から四時。われわれの心とはうらはらに小春日よりの快晴だった。

関西の主なる柳社や川柳会の多くの方々が遠路わざわざ駈けつけてくださった。

立ちならぶ榊は川柳関係がほとんどで、故人の巾ひろい交友のほどがうかがわれた。

文化祭川柳大会の選者、九輪抄、大萬川柳と、白柳さんの肩にかかっているすべて、これから先きのことなど、昨日からのショックで、さすがの僕もまいった。

無人機型の僕に、温厚型の操縦者、白柳さんあっての編集部だったのに。

すでに十二月号は編集ずみである。一部入れ替えたものの、十二月号はどうにもならなかった。戒名の〝釈白柳〟は、生前から故人がきめていたそうである。

——合掌

二月号は清水白柳追悼号
二月句会は白柳追悼句会とします。

麻生路郎・霞乃先生（奈良）
（昭和18年・雑誌奉還の年）

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 5 —

三十年　十月号

老人の日だと新聞だけで知り
秋の風　ここでも蔵に突き当り
朝夕はなどと言うてて浴衣で出
宿命か　櫓臍の役をまだつとめ
未亡人これもだまされたと思い
手術する金と信じて出してやり

三十年　十一月号

家を買う　謡を習う忙しさ

三十年　十二月号

一泊も一人になった味気なさ
一泊に金は女が出したらし

三十一年　一月号

足袋の新らだけだが僕に春が来た
サントリーで詩を談すもの春らしく
舞初めに母も坐ったままで舞い
まだ飲ますとこを探すも松の内
食うや食わずの顔もしてない旅役者
湯たんぽがあるかと老いの泊り客
留守番をさされにゆくも老夫婦
米を買う金とは金も淋しいぞ
ルンペンの自由さないが今日も飲み
ムザムザと使える金が少し欲し

晴浜氏を悼む

白菊の枯るるが如く君や亡し
どっからか子が聞いて来たエピソード
勤続三十年　まだ電車庫の裏に住み
車庫入りが続き　住之江風邪をひき

三十一年　二月号

名が売れただけで淋しいことないか
恩師いつしか　踏台にされ
大工さんも背広で来ると僕という
人気あるうちに借金すすめられ
画の方で知られ患者が来てくれず
外人へパパの英語ははかどらず

三十一年　三月号

謙譲であったばかりに隅で生き
養子など要らぬ要らぬと女医は老け
晩酌の中でそろばんおかされる
社長の子が社長になって左り前
駒投げて刺身を二人前造り
母親と似たのへ車掌道をあけ

三十一年　四月号

来ぬ人を待つにマッチの軸をかみ
又　父が葬儀の委員長にされ
零号もいつしかねだることを知り

画

これ非売品やぜという鯛を描き
この床にこの鯛マッチしてるとさ

三十一年　五月号

随筆をかいてるそうな停年後
さびしがる人となりなや葉桜へ
老人がとぼけて生きる手を覚え
政治家で売れず仲人して暮らし

梨里結婚（二句）

大安へ父も賛成したくなり
妻が撮り　夫が撮るも新婚の
雑沓にここだけ右を歩かされ
雑沓で出つけぬ母を迷子にし
内気な娘　酒はのめない顔をする

（遺稿・清水白柳）

近作柳樽

竹原市　三宅不朽

かかるとき聞くおやじとはいい言葉
唇薄き女ありき曼珠沙華
鶏小屋の一羽になって鶏を思う
満月だ笛の音でもせんかいな
曼珠沙華滅反呪う彩で炎え
義理堅い男で妻へ小さく居る

八尾市　高杉一千歩

代り合い故里の声　初電話
逃れ来し滝の宿にも人がみち
ふと過去が戻って来たよな秋の雨
さり気なくうった相槌仲なおり
クライマックスシルエットだから見てしまい

大阪市　小出智子

コンベアに乗る一足の朝の靴
みくじ引く掌に夢を掬えり

北川春巣選

虫啼かぬ夜は寂しとも不吉とも
心境の変化がペンを軽くする
知りたくない夫の嘘を聞き流す

七尾市　松高秀峰

栄転に喜べないと共稼ぎ
言分があるから障子を強く締め
本当に大器晩成角がとれ
爪に灯を灯した祖父母へ自家用車

大阪市　江城修史

偽りの愛と知りつつ腕を組み
三対一の一が吾が家をリードする
雑踏に後姿の友も老け
黄昏れる人生金に妥協する

大阪市　河野君子

再会に心の皺は見せるまい
新婚の愛をこぼして発車ベル

来る度に見収めと云う老母を連れ
半分は泣いた笑顔で父見舞う

鳥取県　両川洋々

投げられる気合いも師範誉めてくれ
百姓に米作らせぬ法ができ
このうちも婦唱夫随で金を貯め
パトカーの事故もパトカー来て調べ

和歌山市　増田めぐみ

昼の月なんのお話しのき雀
夕月は忘れた人の顔となる
だんらんも心のすき間うめられず
化粧では心の疲れかくせない

大阪市　大西為二

知恵うすき子に生きる道教えられ
苦労した姿と見えぬ菊の花
肥えるのを恐れぬ秋の娘たち
好きだとは云わずに花を替えて呉れ

岡山県　目賀芳月

秋晴れを妻子に奉仕して夜業
追う強みなどと応揚にかまえてみ
夏やせの身に忘年会のコマーシャル

広島市　槙田英詩

ジョニ黒を抜きぜいたくな愚痴を言い
水昌婚少うし浮気したくなり
火の車ですと新車で借りにくる

東大阪市　宮西弥生

曲線に眉画きなおし和服着る
席ゆずる善意の瞼澄んでいる
童心にかえる今宵のまるい月

島根県　堀江芳子

口髭を生していても市場籠
倖せにします胸張るモーニング
まだ酒の足らぬ手拍子よく揃い

竹原市　脇本政己

あの人を射る矢がなかなかはなれない
人間も生きものでしたPPM
仏像が美人にみえている邪心

鳥取県　鈴木村諷子

感情は箸の先まで来て止まり
金だけは払って豆腐忘れて来
得意の夜セコンドまでが浮かれとり

守口市　岸本豊平次

ふる里も電化西瓜も井戸忘れ
終電に酒の匂いを肩に受け

お衣裳もほめられているおさらい会
大阪市　小谷葉子

幸薄い美人の指輪の空回り
匂い袋はずす私に終宴か
掌の化石に愛をうずめゆく
仙台市　川村映輝

立志伝非道の人のおかげです
豊作の俵無造作にころがされ
騒音も日照権も金ですみ
八尾市　飯田一治

長生きの秘訣を若い医者に聞き
愛の知恵みごとに男の罠におち
お化粧をしなけりゃ負ける自尊心
大阪市　阪上十止庵

ひと言が多くて主任にもなれず
積むだけの本を月賦で買うときめ
百円の鯉四五日はエサをやり
守口市　野呂杜月

颯爽と二夫にまみゆる綿帽子
あのそれで用が通じる老夫婦
清掃者落葉の色に無関心
竹原市　楠貞子

生甲斐はビールの泡を妻と分け
お人好しもうけにならぬ用ばかり
家具一つ買って心境まで変る
鳥取市　有田鹿の子

枯れ草となる人生をふと想い
好きな柄五十路の秋を派手に着る
青い目の旅人単語でもてなされ
岡山県　武元柳子

減反へ稲穂すまなさそうに垂れ
気にそまぬ話に坐り秋扇
そばに茶菓置いて縫物はかどらず
輪島市　山元無限

捨てられて涙の種になる指輪
女房をどなれば債権者は帰り
教会の鐘を合図に不良寄る
竹原市　生信笑子

めぐりくる夜を白壁耐えている
物食べる機械となって秋と言う
鶴折って指の白さを意識する
神戸市　横山孜孝

名人芸ぐっすり寝ても乗り越さず
特売場だけが私の百貨店
アリバイが崩れ忙しい輪転機
愛媛県　小笠原仲美

ちちははも不倖せにして里で泣く
やり切れぬ話の帰り生ビール
昭和元禄農夫順朴さを忘れ
小松市　村井城南

母に似た器量で根気のない男
どん底の頃を笑えて妻と旅
自家用と云う乳母車で母達者
和歌山県　ふきあげ虎城

園児らの声に翼があるらしい
風に掴かまってマキシムの裾優雅
嘘がつまるセールスの華麗な声
尼崎市　中谷利美

断絶をたかがハシカとみた誤算
親が眼をつむるテレビのキスシーン
さんぱつ屋泣かせの髪で反戦歌
島根県　東原福子

潮満ちて竜宮となる朱の鳥居
栗はぜて下校の子等を誘いこみ
口髭をはやして心にも鎧着せ
京都府　矢野晴光

夕焼けも参加し終った万国博
歩いたら着いてる頃にバスが来る
胸バッジはずして今夜は飲むつもり
東大阪市　落合思月

一とときの倖せ孫が肩をもみ
マンションに住んでて会社でお茶をくみ
断絶は悲しい余生も手内職
大阪市　堀口欣一

赤い羽根つけて老父の一万歩
貝殻節悲しや過疎の裏日本
町会の顔役にして義手義足
大阪市　平井露芳

個性ある字だとお世辞云って呉れ
食べられぬ魚を釣糸垂れて待ち
水色の絵具で書ける水がない
大阪市　白石良圭

乗車する列で女はコンパクト
東福寺にて
雪舟の庭の夫婦へ夕焼ける
焼きいもの香りも十月らしく来る
大阪市　木村久子

気楽さについつい歌も出る貧乏
物忘れひどくなったり手も足も
プラモデル餌に孫をば連れ歩き
東大阪市　斎藤三十四

訪う人もないが今朝ヒゲをそる

黙ってて板場の味のわかる客
新聞折込み働きに来いと云う
大洲市　堀内暁風

スタミナは昔ながらの生卵子
あれこれと思い出古稀の年暮れる
河内長野市　森本黒天子

青空へ雲は手を替え品を替え
名ばかりの小鯛喜寿の誕生の膳に乗り
東大阪市　坂東若芽

ピーポピーポ酷暑を眠そな救急車
まだ腹を立てる若さが残ってる
広島県　南条露声

あの頃の母も秋茄子好きだった
揉まさせて戴きますと夫婦仲
鳥取県　山形春海

腹巻きにしこたま入れて派手に酔い
せめてものぜいたく父の日寝て憩い
新宮市　小山峻

盆栽を貰ろて二三日水をやり
この宿も石油臭い蜆汁
鳥取県　近藤秋星

赤い羽根ある日夫に借りられる
臨月へ他人事ながら気にかかり
富田林市　川端文一

いんぎんなものごし押売とは見えず
酔眼朦朧終着駅は雨
島根県　大森孝華

楽しさは三日だったとアルバイト
旅馴れてトンネルくぐるこつを知り
松江市　村松酔歩

虫の命短し男秋を病む
過疎かなしワサビは老いの手で守り
和歌山市　吉野冨子

盛装をして銀行へ借りに行く
海と山見える角度に露天風呂
羽曳野市　大峠可動

朝日恋う自由を持たぬ墓へ花束
思い出の窪みに墜ちて一人ぼち
大東市　荒木鶴翠

明るいから腕をはなして歩く恋
歯に衣着せて方便つかいわけ
大阪市　里小路

直立不動で銀婚写される
票かせぐ観光バスに誘われる
新潟県　高野不二

自殺して見せたい程の不作なり

占いもやっぱり努力せよと云う
大阪市　岡本　まさひろ

ライバルの白いハンカチ意識する
苦をもって苦のない顔のテレビ消し
鳥取県　林　露杖

子が建てた小猫の墓にちちろ鳴く
欠伸して虫歯にしみる秋の風
西宮市　丸山孔一

玄関の小さき靴に留守の寂
子なき親　親のない子に秋の雨
和歌山市　樫村ふみよ

たどたどしいお経も盆へかり出され
菜も人もくたびれている午後の市
米子市　増田竹馬

大臣も大根の値聞きあきる
瞬間湯沸器妻の血圧買うと決め
兵庫県　荒井良枝

九回の裏は憎らしコマーシャル
生きがいをさし木の菊に教えられ
京都市　山本峠

君の目ン玉にぼくだけの星が棲む
中年の恋へ湖水が凪いでいる
大田市　藤田軒太楼

親指をたてて所在を確かめる
新薬へ揺らぐ心が拍車かけ
高知市　竹崎寛

十号台風大荒れ
水攻めの畳へっぴり腰が鳴り
台風禍へへそくりも一緒に押し流し
島根県　錦織文子

忙がしさ口程でない長電話
口笛を受話器へおくるロマンの夜
和歌山県　仮家和美

ステッキが覚えていよう師の歩調
茜雲どこより暮れるやさくら貝
島根県　榊原秀子

それとなく発育比べ合うも親
生きるため出来たこの皺憎めない
大阪市　西本保夫

ゴマすりもバカにもなれず平社員
空想は楽し一旗挙げている
宿毛市　山本窓花

命まで預ける売るのと流行歌
立ち読みの出来る本屋で待ち合わせ
羽曳野市　麻野幽玄

蝶トンボ子と追い過去の中にいる

米余ってるのに案山子立ててはる
羽咋市　三宅ろ亭

ススキ原歩く倖せ過疎の村
棄ててよいズボンへ母の継ぎを当て
新宮市　大矢十郎

毎日を切売りに似たペタル踏む
まだ妻に怖い日もある月七日
堺市　栗本藤持

過疎の里久々訪えば道狭し
暇も金もないと笑って倖せ
岡山県　山田止水

食べさしを丸呑みにした電話口
同級の孫の話の馬鹿らしさ
寝屋川市　福富隆子

六十の色香は失せて味の人
免許証取れずやれやれとも思い
泉佐野市　大工静子

雨祭りアイスクリームの足重き
カスガイの弱さ養子引裂かれ
岡山市　谷森和風

百姓へ未練残らぬ地価ブーム
上を見るわけではないが上があり
青森県　岩淵一星

二人になれて悲しい老夫婦
出稼ぎは買って来るぞと見送らせ
高槻市　山田スミ子

味覚の秋へ炊事場は忙しい
父ちゃんの腕力子等が笑うだけ
今治市　伊藤一郎

取り替えてバッグ女の一部なり
値上りと聞いて醤油一升買い
今治市　大木バット

鰻屋と茶舗は匂いで客を呼び
夫婦して物忘れして怒り合い
今治市　真山国彦

刈り終えた田んぼが広いにぎり飯
哲人が住むには日本汚れすぎ
今治市　今井松花

値踏みする癖が役立つ当てまショー
校長が代っても運動会は雨
大阪市　花田繁子

生傷の絶間がなくて孫達者
受験する子が用心棒をかね
大阪市　吉野志津

万博跡ひっそり秋風吹き抜ける

十五夜にこおろぎの声も供える　大阪市　鈴木生仏
菊の花人形に化けて槍も持ち
藪医者と口でそしって頼りにし　大阪市　木村浊水
老人手帳嬉しくもあり又わびし
松茸もサンマも主婦は目の保養
深夜でも帰るつもりかコンパクト　大阪市　松岡進
顔よりも曲線を売るモデル嬢　富田林市　板尾凡吉
逃がすまいとする欲だけまだ残り　大阪市　藤田頂留子
お早ようと写真の母にはたきかけ　尼崎市　小林文月
彼氏へのみやげBG軽く持ち　河内長野市　井上喜酔
ウップンを晴せば財布空になり　笠岡市　山本柏生
敬老も花火のように消えて行き　米子市　石垣花子
嫁した娘のエプロン姿も板につき　岡山県　武内雅堂
ビルばかり大型になる年の暮れ　島根県　中島英子
体育会応援だけのくつをはく　竹原市　簑田浄美
ボンヤリとわたしにだけの秋みつけ　鳥取市　藤本和宏
ライバルに男の貸もするゆとり　鳥取市　藤本佳女
女心買えぬ宝石見て回り　鳥取市　藤本鎮也
二号には負られぬ気の厚化粧　鳥取市　藤本恵子
念願の母を誘うて京の旅　和歌山市　垂井千寿子
合同祭宗旨違いも並べられ　大阪市　岡部シゲ
衣がえしてお婆ちゃん若返り　大阪市　村島秀村
市場籠山盛りになる時も秋　大阪市　今井隼人
風邪熱の孫にバナナを土産にし　今治市　古野伶人
五十年ビリの奢りでクラス会　今治市　原田輝親
香も味も抜けた茶ほどの妻になり

鶏と蒙古風

東野大八

川柳塔同人の西尾栞著「水鶏笛」と小川静観堂著「はいまあと」の二つの句集がこのほど発刊された。栞さんの方は、さわれば指跡のつくようなコールテン張りの超豪華版。これに対する静観堂さんの方は「はいまあと」気軽にまとめて出来上っただけのような厚表紙のもの。前者が隙もなく盛装を凝らした訪問着姿なら、後者は風呂上りの浴衣がけ、といった感じで、双方ともに格別の味合いがあって面白い。

本誌のPR欄によると句集「水鶏笛」は、句品人品・天下一品の美本とある。西尾さんのお姿は、時折の上阪で、川雑や塔の句会には必ずといっていいほどお眼にかかるわけだが、遠目、はた目にもつねに春風駘蕩、その人懐っこい好紳士ぶりは、私のようなひねこびれたへそ曲りも、つい微笑を誘われるというお人柄だ。路郎先生が「名句と難句」で

―**効きすぎたかと両親の眼がであい**

をとりあげていられたが、私も何故かこの句が頭から今もって離れてくれない。

「栞さんはいつも、私の句には特徴がない。いいかえると個性の色調がうすいとよく言う。勿論、彼の謙譲さが多分に含まれての言い分であるが、私はそういう目で彼の句を受けとってはいない。彼の句には、彼の言う通り豆秋調とか鮎美ばりとかといった厳しく打ち出された栞調という句風は或いは薄いかもしれない。しかし、たとえばこの句集をよんでみると判るとおり、全巻に流れる栞の味、アブサンやワインの香りがいつもよりそうでているフランス料理に接した時のような高雅さと艶麗さを感じるのである」

以上は中島生々庵さんの序文であるが、まさにうがち得て妙と申すべきであらう。酒のPRに「平凡の妙酒」というのがあるが、私はこれがピッタリではないかと思う。

水鶏笛という句集の名は、水鶏庵栞から出ているらしいこと。そしてそのニワトリは、明治四十二年の酉歳生れであること。また栞さんの同業者でのトリ年会の命名である「羽搏会」からきていると判った。

エトの酉（トリ）は、酒からきていて、サカズキを現わし、ニワトリとは全く縁がないのだが、干支になるとトサカの方になる。中国では、正月元旦は鶏の日といっていて、禽獣の首座にある。まことにメデタクて、天の金鶏星が下界において鶏となり、いろんな人間世界の役に立つことになった。中国の昔、金で作った鶏が宮廷の入口に立つと大赦令発布を意味したそうだ。

名古屋のさるトリ料理店のシオリ（栞さんではない紙製）によると、惚れた女を得んとせば、雄鶏の両毛先をとってそれを焼き、酒中に入れ飲めば、立直に本願成就とあった。唐の揚貴妃は、鶏の羽根先が大好物だった由で、中国料理ではこの材料のことを貴妃羽先という。名古屋のトリ屋の逆説で通りそうである。そういえば、この美女揚貴妃が、リ山の温泉で浴後、片方のオッパイをあらわにしているのをみた玄宗皇帝が歓喜愉躍してそのふくよかなるものをにぎり「軟温新らたに鶏頭肉をもぎとる」とヤニ下ったそうな。

「詩経」にもニワトリの詩は多い。その中の「鶏鳴」などは、内助の功あつい奥方を賛えたもので、そんないい奥さんのコトを「鶏鳴の助」という。孔子も孟子もニワトリが好きなことは、その詩作に詳しいが、どうもせんさくするとすべて奥さん方の点数とりのためのPR作戦のようである。鶏とは要するにミセスを指してのことで、このミセスが暁を告げるとき国滅ぶ、といったのはどうも荘子らしい。

余談にすぎたが、私はトリ料理では若ドリより、羽先の天ぷらが大好物なので、つい、水鶏笛から、ニワトリだんぎになってしまった。本句集の序文その他、後記にまで、西尾令夫人のことなどからして、余談もまたむべなるかなと判じた次第なり。

こんどは浴衣がけの「はい まあと」句集の方、この小川先生とは、戦前もはるかな蒙彊張家口の出会い。往時、小川さんは、蒙彊陸軍病院の陸軍三等軍医さんであった。半白温顔の赤帯の軍服も見事にぴたりと着こなした中年紳士だった。岩崎柳路さんの案内で、さる料亭で酒くみかわす光栄に浴したが、そのとき、小川さんから頂いた色紙が

——蒙古風みるみる天を埋めたり

というのである。練れた達筆のそれは、私の貧しい下宿の壁にぺたりと貼りつけられていたことだが、この句を名句と成得するユエンのものは、黄塵万丈のあの大陸独得の風塵期を体験したものでしかわからないからだ。

「はいまあと」の

——女体にもう一つ女体あるような乳房

——その辺にスピツツつないで置き野点

など、その他最近詠の句を拝見しても、どこか野放図なまでの天衣無縫ぶりは、私にすれば、蒙古風の洗礼をうけられた一面の効果ではアルマイカとも思うわけだ。

——静寂の淵で古城跡冬を耐え

の句と愛媛県の出身とあるところから、私信を奉ったところ、案の定、私と同じ郷里の伊予の大洲でしかも大洲中学（旧制）の第一期生ときかされ今更ながら、愕いたわけである。同じ四国の片すみの、同じ町の生れの二人が、それとは夢にも知らず胡砂吹きすさぶ蒙古の地で、鼻つき合わしてのパイ一。しかも、この句集によれば、小川さんの作句開業は、その蒙彊張家口だったのだから仏語「縁即生」である。

大同の石仏の膝の辺に、どこかの大学の教授風が偉張って立っている額が掲げてあるので、岩崎柳路さんに

「一体、あの仁は何者だ」

ときいたら、彼、うやうやしくいずまいを直し

「麻生路郎先生やがな」

と自慢のチョビひげをなでながら、いとおごそかにそうのたまわったものである。そこへヒョロリと入ってきた痩っぽの色男。「酒はまだあるか」といったのをみると出入りの酒屋と踏んだが、このご仁が、当時番傘で鳴らした山崎小鮎さんであったわけだ。

「番傘同人、川雑同人、これに大八君が加り、軍では赤帯の小川さんがやるというたはる、一つ蒙彊川柳会を盛大にせにやいかんがな」

柳路さんは大ハリキリで、パンパンと手を鳴らし、現われたお店の美人の一人に

「酒、たんともってきてんか、うわばみが二ひきいよるねん」

そういって柳路さんは、いそいそと朝っぱらから酒席のための部屋のとり片づけである。酒が来、料理が運ばれると、柳路さんははたと小ひざをたたいて、小鮎さんにいわく

「病院の小川先生もよんだら、ええか、来やはったらあんたら二人、川柳大明神みたいにうんと川柳を持ちあげて言うのんやでえ」

そしてまたしてもいそいそと、電話機の方へ小走りしていくのである。

川雑の路郎先生一辺倒の柳路さんも亡くなった。小川さんの「はいまあと」は、題名がいと気軽なだけに、逆に私には哀しい想い出をそそるのである。

病院から

橘高薫風

—不二田一三夫宛

▼院長がレントゲンを見て即日入院を命じ、胃カメラをのみましたら「切らんならんナ」

▼写真を見せてもらったら、屋島のようなハッキリした影でした。

▼今日から輸血点滴をはじめました。血の気の多い薫風ではないらしいです。（十月九日）

▼病室は明るい大部屋で十二名が見通せ、その裏側にまた十二名がいる実に大部屋なんで連絡船に乗ってるようです。向いの右斜めには小型のコスイギン首相が食事をしているし左斜めにはビートルズのような青年が煙草を喫っています。（十月九日）

▼まだ切ってないのにキッタカさん、キッタカさんと云われ、いよいよ明日はほんとうにキッタカさんです。（十月二十九日）

▼手術無事終了。すべて順調、輸血の必要もなし。（十月三十日。窪田久美子氏ご連絡）

九輪抄

清水白柳選

毒舌のなかの笑顔が石になる　大阪市　正本　水客
死んだ真似する蜘蛛に君なり給え
人の心を見つめる羅漢眼を細め　岡山市　川端　柳子
逆えば風が嘲笑して過ぎる
あとになり先になりして妻の影
憂きことをたたみ捨身のあざやかさ　京都市　山本　峠
涙線を締める喪服にあすがある
天と地へ夢の構図を描いてみる　姫路市　前田芙巳代
逢えばまた鎖が重くなる愛か
さりげなく訣れ白檀の風を置く　東大阪市　久米奈良子
余燼なおくすぶる愛の扉がきしむ
果てもなき愛の布石を辿るなり　倉敷市　水粉　千翁
階段は妥協の道としてのぼり
私を信ず決勝点がある　竹原市　時広　一路
キャンバスの構図は紅い紅い花
七色に染められ島の今日が暮れ　倉敷市　小野　克枝
厚い霧とざす樹海を這う女
胸の炎が濡れているとは気付かない

二つある乳房へ片手慌てたり　八尾市　高杉　鬼遊
因襲の果の鎖が錆びている　島根県　小砂　白汀
溜って来た輪ゴム失対の群に似る
池の水涸れて地球の恥部さらす　竹原市　森井　菁居
茶のこころわからず茶室の孤を愛す
海の死を画布へ弔う黒き彩　青森市　工藤　甲吉
転任もこれが最後の荷はわびし
たとえば俺が泣いても人はふり向かず　大阪市　中川　滋雀
中庸を歩いていつか忘れられ
ひと皮を剝いて見かけの朱を惜しむ　倉敷市　小幡　里風
去る者は追わず主義として歩るく
砂の塔崩ずる愛の渇に堪えかねて　大阪市　吉岡　美房
活け魚明日を限りの城守る
迷い犬求むるものの小さきを　今治市　月原　宵明
思うてはならないひとよ蔓珠沙華
花時計退屈そうに蝶を見る　札幌市　平野　青夜
富田林市　岩田　美代

つかの間の倖せならば摑むまい　和歌山市　垂井　葵水
地面師の巻尺無垢な体位とる　岡山県　武内　雅堂
忍耐のある日孤独な父となる　島根県　榊原　秀子
碧空があるから詩を忘れない　大阪市　阪上十止庵
出世とは机が大きくなっただけ　守口市　羽原　静歩
尼老いて涅槃の風を窓に聞く　八尾市　飯田　一治
愛うすき女汚れなき道歩む　松江市　柳楽　鶴丸
空想に過ぎぬ実行のない自由　京都市　松川　杜的
汽車弁を無言で済ます老夫婦　大阪市　宮尾あいき
理屈をつけて劣等感をかばう　七尾市　松高　秀峰
あきらめている笑顔だと子は知らず　小松市　四方天弘美
遠足があるぞと朝日児を起こし　鳥取市　近藤　秋星
父のそれに子は輪をかけた筆不精　岡山県　三輪　康明
ふる里の童話聞かせる北の風　岡山県　山田　止水
蟹なれば横に走るも夫婦連れ　大阪市　神谷凡九郎
脚色をされて浮世と云う色さ

東大阪市　竹中　肖二

足取りも軽く紺碧の朝を出る
倉敷市　松下　梁水

洪笑へ自信は音もなく崩れ
桜井市　岩本雀踊子

足音へ銭がはげしい息をする
倉敷市　竹内　翁童

逃げ道を考えてからつっかかり
岡山県　出原　敬一

あしたへの進軍ラッパ今朝も吹く
東大阪市　竹中　綾女

前歯一つ抜いて食事のままならず
大田市　藤田軒太楼

上ばかり見るで足許が定まらず
愛媛県　渡辺　暁童

地下足袋に否応もなくなじまされ
羽咋市　三宅　ろ亭

菊作らない男が他家の菊をほめ
広島県　南条　露声

コンパクトぱちりと女赦すはら
小松市　馬場　魚山

禁酒して一年くすり飲み馴れる
神戸市　仲どんたく

語る人求めて彷徨う犬となり
大阪市　今西　章雅

堕ちてゆく女いのちにしがみ付き
熊本県　有働　芳仙

鉛筆でないと書けない養老院
島根県　錦織　文子

孝養の一つへ苦言の聞いており
大阪市　宮地　双楽

酒煙草公害からはずれてい
藤井寺市　西　いわを

追いかけて追いつけないと判る足
大阪市　木村　水洞

倖せの一つに眠れる墓があり
大阪市　西出　一栄

病院呆けうたを忘れたカナリヤか
鳥取県　両川　洋々

せかせかと働く妻に言いそびれ
鳥取県　鈴木村飄子

善人になろとするののあほらしさ
羽曳野市　麻野　幽玄

これからと云う潮時へ通り雨
豊中市　戸田　古方

金になるからホジくってみたスキャンダル
東大阪市　落合　思月

パン食になじまぬ母へ別にたき
大阪市　西川　誓二

身辺の整理逝く日が近くなり
竹原市　生信　笑子

電卓よこの駆引をどう弾く
小松市　村井　城南

虚飾なき幼児の眼に親の所作
和歌山市　高岸　桐蔭

簡単に切ります白衣そっけなし
小松市　村井　城南

病院のいとさわやかな朝である
小松市　村井　城南

職人の目に職人のだらしない
和歌山市　高岸　桐蔭

笑ってはいるがあの顔堪えている
和歌山市　高岸　桐蔭

腑にしみる晩秋の酒妻と旅
岡山県　直原七面山

国訛り忘れ淋しい街の貌
岡山県　直原七面山

妻入院てんでに食べててんでに寝
松江市　岡崎　祥月

家計簿の赤字と別に女着る
松江市　岡崎　祥月

月のない夜空引きずる靴の音
和歌山市　小川佐知子

日誌白巡視終ったお茶うまし
和歌山市　小川佐知子

ささやかな反抗チャンネル守りぬく
米子市　八木　千代

汽車の旅みかん一つで打ちとける
米子市　八木　千代

自嘲とも使命とも虫鳴き急ぐ
大阪市　江城　修史

妬みとは気付いていない眼で燃える
大阪市　江城　修史

握手して別れる友の指の冷え
大阪市　小谷　葉子

秋の空叛きし友は想うまい
大阪市　小谷　葉子

疑心抱く友にも虹をあたえたく
大阪市　大坂　形水

簾糸取る倖せのひと時よ
大阪市　大坂　形水

静けさに我れ足許をたしかめる
大阪市　大坂　形水

どぶ川の向うへ渡る橋がない
清水　白柳

謎めいた言葉戻ってから気付き
清水　白柳

万博の裏目出て来た十二月
清水　白柳

遺句

堺　岡遊

日曜の座禅の若さ眼に残り
実相庵集団見合いにも似たり
息つめてふすま絵見入る大安寺
家原寺の母娘と見えて真剣な
防潮堤旧い港を隔離する
海の色してない海を船疾る

同人吟
秀句鑑賞
——前月号から——
菊沢小松園

不死身めくサボテンにして水に負け

森井菁居

サボテンの頑健さを不死身と云ったのは適語、川柳に於て動かぬ適語を得ることが句の成立上の重要な課題。何者にも泣き処はある。サボテンの強さにも水のやり過ぎが一番恐い。

台風へうちのアンテナだけ健気

野田素身郎

うちのアンテナで他家のアンテナの数多く倒れたことが判る。擬人法で対比の妙を自然に無理のない形でよく現わされている。

お不動さんへ万博帰りが水をかけ

山川阿茶

万国博の科学性と何と神秘な不動さん、そこに現代人の複雑な多様性を見る。これは法善寺の水掛不動尊であろう。

見ぬ振りをしててはしつけ許されず

浜田久米雄

現代人の事なかれ主義は如何に見て見ぬ振りの多いことか、川柳の本質をわきまえた要領よく簡潔に纏められていること、さすが。

万物の霊長蝿取紙にひっかかり

本田恵二朗

本来の目的以外に突発する事象が笑いを催すことがある、殊にそれが仕掛けた当人が引掛ったならば一層面白い、上五の大上段に構えた出だしに対して下五で軽く裁く、川柳の独壇上の表現が印象に残る。

さざ波へ明月伸びたり縮んだり

石川倔流洞

実況を見なければこの句は生れない、伸びたり縮んだりの比喩がとても川柳的で面白い、自然現象もここまで詠まれると言う立派な見本。

銀婚すぎた以心伝心

渡辺暁童

川柳の起承転結を何処まで簡潔に表現できるかとしっかり要点を摑んだ句、銀婚も過ぎた夫婦生活の経験は日常動作にも一々言葉にしなくとも其処はツーとカーで眼でも手振りでも判る、ここまで辿り附いた経験が短かい、この下五に現わされていて、老練、さすがである。

荒っぽい言葉女が生きて行く

岩本雀踊子

如何に女性上位の時相とは言え、女一人の生活は決して生まやさしいことでは無い、心ならずも荒っぽい言葉に慣れて行かねば食っては行けない、その生活の内容まで窺えて面白い。

いつそ朱に混れば楽な掌を見つめ

中川滋雀

誘惑の多い世の中である、いつそもうと思う日はあっても、そこは人間の善良さはじっと掌を見る、この自省が苦しい。世渡りの中に真実の一路を見出してくれるのであろうか

日御崎にて

灯台の夕陽神話を抱きよせる

尼緑之助

紀行吟はむつかしい、その雄大さに押されて自分だけしか通ぜぬ句、ひとり良がりになり易い、壮麗な夕陽を通じて神話の国の大観下五の抱きよせるでぐっと句に遠い往古への縋りを見せる、名手として推す所以である。

狂人ものせて地球は回転し

天正千梢

地球から見れば狂人も普通の人間も一視同仁であろう。むしろ総ての生物の存在すら何等の影響もなく円満に回転しているのかも知れない、人間の小さな標準の誤差から生じた狂人なんか問題で無い、とにかく地球は廻っている大きく現実に。

近作柳樽
秀句鑑賞
——前月号から——
若本多久志

イメージチェンジしてもネガはそのままに

小谷葉子

先入主のおそろしさ—況して女性にとっては—このネガは怨嗟でなくて、あたたかいネガでしょう。イメージチェンジ、ネガ。こんな言葉を駆使しても少しも嫌味にならないのが、この句の身上で川柳でしょう。巻頭お目出度うございます。

雑踏に暮しの違う話聞く

江城修史

作者より上の暮しの話か、下の暮しの話かどちらか知らないが、雑踏の中でフトきいた話に上には上のあるものだ、下には下のあるものだと雑踏というイライラの中で、小さな自慰も感ぜられた句である。

公害へ虹も半端な彩で立ち

三宅不朽

目線たてる今日の公害へ、柳人となると、こんな余裕がある。虹も半端な彩で立ちの半端は正に川柳調の独壇場である。

わが国を確めて地球儀を買う

ふきあげ虎城

たとえば和歌山県なら和歌山県の地図を拡げるとすると、確実に載っていることが、わかっていても、自分の住んでいるところを先ず探す。この人間共通の心理を川柳人はうたいあげて共感を喜ぶ。

人質のように夫へついて行き

南条露声

女性上位だなんだかんだと言うても、所詮は夫についてゆかざるを得ない。人質という大げさな言葉が川柳の面白さである。

吾が子程の看護婦さんに賞められる

楠貞子

『アーラ、みんな食べましたか、お薬も忘れずにのみましたか、お熱も下がりましたね』とほめてくれる看護婦さんが、自分の子供程の齢頃だと思うとおかしくなって出来た句。このような句が出来るようになると退院も間近です。御快癒をお祈り申上げます。

核家庭事態の是正なりがたし

渡辺都留逸

事態の是正なりがたしという。かたい言葉だが、二度三度読むうちに、どこかに救われる事態とユーモァーがあるのがこの句の生命である。

豊満な胸が校医を慌てさせ

山田止水

おどろく程発育のよい、この頃の小学生の体格検査の一駒である。豊満とは些かオーバーだと思ったが、先日テレビで、初潮が十一才何カ月というのがクラスの四分の一とかの話をきいて、或いはオーバーでないかも知れない。その豊満なボインちゃんを出している、本人は至極無邪気である。だから校医は余計に慌てる。

その他の佳句

十字架よ敵を愛するむつかしさ　若芽
過疎ここのせめてのおごり星が降り　政巳
青い鳥だったと此処へ来て悟り　史朗
俺たちのノーキョウ世界に名を知られ　芳月
赤飯もたかず佳き日をよそで酔い　千歩
上に立つ相と言われたままで老い　三十四
泣いて勝つ子に勝たせない育児法　南奉文子
欠点のなきが欠点うちのパパ

喪中につき年賀欠礼させて頂きます

南大阪川柳会

金井文秋

求句境

戸田古方

まつり（祭）

クリスマスを冬至明けの祝いまつりだということをきいたことがあります。十二月の二十日を一日二日過ぎたところでくるのが冬至であり、それから二日三日たつとクリスマスです。

クリスマスのつきものは赤い外套のサンタクロース、雪をかぶった樅の木、馴鹿の橇、どれもこれも寒い北国の風物です。晴れた夜空の輝く星がキリストの誕生と結びつければ結びつくものの、どうやら、冬至明けの祭といわれれば、そうかとうなずけます。

欲しいものは欲しく、欲しくないものは欲しくないのは昔も今も変りのないこと、科学的な説明のできない古代の人がキリストの降誕とうまく結びつけて、季節のよろこびと救いのよろこびをミックスして叫び踊るのでしょうか。

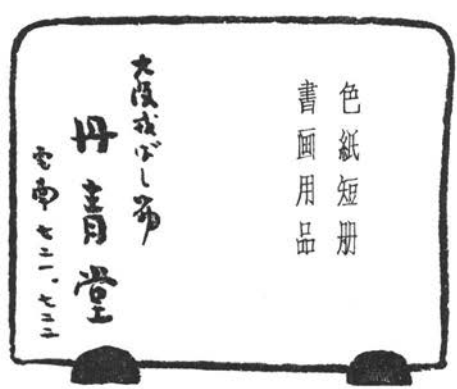
それは兎に角として、歳末というかきいれ時の商売人がこれをうまくとらえ、利用してほとんど宗教抜きのようなクリスマスながら、年々盛大になっていくようです。

それに比べて、四月八日の釈尊の降誕会、お花まつりは、そのみちの人々の間でささやかに営まれる以上には発展しません。これも春が目の前にきたのをよろこぶ迎春祭といってもよさそうに思うのですが、世間がついてきませんので、仏教徒たるものいささか淋しい思いをしています。

四月といえば桜はすでに咲いています。つづいて、間もなく、百花が咲き乱れる季節です。自然そのものが祭りの歌を唄い、踊りを踊っているのです。人間が、さあ祭りですよという必要がないのかもしれません。

それは貧しい曠野にキリストの救いを見出した人々のよろこびと、満ち足りた世界の中で、尚且、抜本的な幸福の探求をされた釈尊の解脱とのちがいででもあるような気さえするのです。

あく（悪）



私はある日、コンピューターによる性格判断機の前に立ちました。名前と生年月日だけ書いて渡すと、しばらくコトコトいうて、色違いの四枚のカードがＡＢＣＤと符号を打って出てきました。Ａには理想家とあり、Ｃには相性は酉年、Ｄには商売人に向くとは書いてありませんでした。なかなかよう当っています。Ｂには「あなたは内面が悪く、外面がよい」とあるのが、いささか気になります。これを見ていた女房は酉年。「これがあなたの本性」とぽつんといいます。

初対面の人は私を、うっかり買被るかもしれません。買被られると、つい自分で自分はよい人間だと決めてしまいそうです。人間、

はたしていいものでしょうか。孟子は性善、荀子は性悪といいました。どっちがほんとうなんでしょう。うぬぼれの強い私は性善を信じたいのです。ぬるま湯のような人生を送ってきた幸せな私は自分で自分を悪人だなんていえそうにありません。勇気もないし、自尊心が許さないのです。

歎異抄の有名な「善人なおもて往生すいわんや悪をや」より、「悪人なおもて往生すいわんや善人をや」の方がわかるような気がするのです。

性善と思うなら思うでいいから、真直に、ゴマ化さず善を追ってみることです。生半可は生半可、救いはありません。厳しく、厳しく見詰めていくと、どうしたって「善」だと人前で大きな顔をしていえるようなものが出てこないというのです。それでは、それではと追い求めると、行えば行うほど、不安がつのってきて、満足どころか、落着くどころか。それが親鸞聖人のいわれる人間の正体なんです。汝自身の正体でもあるのです。ゆるぎなき本当の幸せへの第一歩は、そこへ入り込んでゆく、地味ではあるが、大きな勇気に伴われなければなりません。

あらそい（争）

東本願寺でお家騒動が起っているとひところ報道されていました。これを聞いて、世間の人は「だから仏教はダメなんだ」とか「信心深い人たちが何故喧嘩なんかするんだろう」とか。ごもっともな話です。

聖徳太子の十七条憲法の第一条には和が述られています。川柳塔社の句会場「以和貴荘」の名はこの「以和為貴」からきています。三十四億の全人類は三十四億通りの顔、三十四億通りの心をもっています。自分の思い通りにならぬと肚を立てていた日には、一刻たりとも生きていられるものではありません。人は皆凡夫で、特別えらい人や、特別ダメな人がいるわけでないといっていられます。

みんな凡夫、只の人、みんなそれぞれ違った考えをもっているのは当然であると、一足下って、譲る心をもつこと、これが和への道でありましょう。

太子は第二条で、仏の教は和への道を開くといっていられます。釈尊は真実とは何か、真実に従うことこそ幸福への道であると説かれました。極端な禁欲、手離しの放従を無益と警しめて中道を、真実への実践として八正道を、そして、全てに優先する真実存在の実証を縁起に求められました。縁起とは原因と結果をつなぐもの、天地の恵みのないコンクリートの上に蒔かれた種は発芽しません。

しかし、行の実践を重ねる間にも人間の本性は本性、人間である限り、属性まで突熱消滅してしまいは致しません。如何に説かれ、教えられても、本性はヒヨコヒヨコと顔を出して、精進の行く手をさえぎります。

こんな人間なればこそ、本性の実体に邪魔されれば邪魔される程、真実存在の確かさがはっきりしてくるのです。こんな人でもと思う代りに、それなればこそ、釈尊の御苦労があったのだと知ることが出来るのではありますまいか。

だいひ（大悲）

一九六九年末の総選挙で社会党は惨敗しました。非武装、中立は間違いないとしても、それボッキリではついて行きかねたからでありましょう。

〝盗人の取り残せしや窓の月〟という良寛さんの句を憶い出します。今日、戸締りをしないで盗人の心配をしない人はありますまい。安保は戸締りです。アメリカの戸締りに便乗してきました。勿論、アメリカは自分を優先するでしょうから、之に頼る以上、アメ

磨かれた伝統の味
御菓子司
鶴屋八幡
本　店・大阪市東区今橋5・電話（203）7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話（261）3996
売　店・各百貨店のれん街

リカの危険、一心同体は日本にとって迷惑かもしれません。

だから、この迷惑な安保はご遠慮申上げたい、というならいうで覚悟がある筈です。何もかも持ち去られた跡の五合庵で、月を相手にゴロ寝をすることができるかどうか。

右の頬を打たれたら左頬も出せというたのはキリスト。釈尊は母族シャカ族の滅亡を静かに見守っていられました。滅びるのも打たれるのも因縁があってのことです。

もし日本が今、突然、完全非武装を宣言したらどうなるでしょう。

日本はこの十年間驚くべき発展を遂げ、世界に於ける役割も大きくなりました。しかし、それは物の話、その物も、乏しさからやっと抜け出たところです。人造りが大切だとわかっていてもなかなか魂が入りません。心の裏付不充分ではエコノミック・アニマルと誤解されても仕方がないでしょう。

陰徳の家には余慶あり、信心の家には魔のつけ入る隙がないと申します。今日の日本に何より大切なのは心を取戻すことです。有徳日本の大慈悲心が世界のホープになった時、誰一人日本を侵すものはなく、不変、不動の平和の保障が自らの手で保たれるのです。その時こそ、戦争放棄の平和憲法に筋金が入って、世界の憲法はこぞって、この条項を自らに取入れることでしょう。

ねがい（願）

産業革命に際し、アダム・スミスは原始以来の自然経済を学としてまとめました。しかし、この生産の画期的改革のもたらす歪みはカール・マルクスの社会主義理論を産むのです。そして第一次大戦後の大恐慌は社会政策から福祉国家へと各国を駆立てて来ました。

元来、経済生活は欲望から出発しています資本主義社会では如何に儲けるかのみを考えてきています。生存競争の名に於てこれを是認しているにすぎず、ギヴ・アンド・テイクはテイク・アンド・テイクになり兼ねません。

〃焚く程は風がもてくる落葉かな〃は良寛さんの句でした。欲――迷――苦、抜苦与楽のためには、今少し、欲ということを考えねばなりません。次代の真実だと称しているソ連や中共の社会経済思想も今の段階では大きな欠陥を残しているとしか思われません。自他共生を教えながら、依然として独裁と専制を続けているではありませんか。

躍進途上の日本にも色々の欲求不満が渦巻いています。口で「アリガトウ」といいながらその意味を知らないのです。有ることが難しい。これは当り前でないのに得られた喜びへの感謝の言葉です。冥加というかっての日本人の心も失われています。手に入るのが当り前と思うから、得られないと不満です。働くとはハタを楽にすること、生きているのでなく、生かされている。働くのでなくて、働かせていただいている。得られれば喜び、得られなければ、その原因が自らにあると観ずる。これが諦めであり、諦めとはそれが真実であると納得することで、すなわち悟りです。もうそこには与える者も、与えられる者もなく、全体の幸福を考える道が一つ真直に開けているだけです。科学もその運用を誤らず、不幸や公害をもたらさないでしょう。

それこそ、誠に、進歩と調和の窮極と申せましょう。

川柳五訓

福浦勝晴

○ひとつ川柳は、まず面白くなくてはいけない。但しこの面白さは、人間が生きる上においての皮肉、諷刺、うがち等一切を含めてのなるほどなるほどの面白さである。

○ひとつ川柳は、特異性がなくてはいけない。一流作家、詩人、俳人等にはマネることのできない、川柳独得のよさである。これらの人たちが口を揃えてらいさんするような…

○ひとつ川柳は、格調がなくてはいけない。レベルの低いことは駄ジャレ文芸と混同され易いからである。

○ひとつ川柳は、つとめて誰にでも解る平易なコトバをもって、表現されなければいけない。ひとりよがりの難解句は表現力に乏しい無能の人間の作と解され易いからである。

○ひとつ川柳は、創作でなくてはいけない。写生文やルポであってはいけないという意味である。

川柳横丁

「ボス」

海士天樹選

43・2月句会

不二田一三夫

「川柳横丁」は十年ほど前に〝川柳雑誌〟へ何回か書いた。句会の句は忘れられがちだから、なんとかして、もう一度、活字にして佳句を味わってもらいたかった。そんな意図から「川柳横丁」を書きだしたのだ。

葭乃先生は、「いい句を選んで、単行本にするつもりで力を入れなさい」

当時の編集長北川春巣氏は、「休まないように」と、スペースの都合で休んだ時、このような激励をうけた。

「川柳塔」になってからは、ページにアナがあいた時だけよりペンを持たなかったが、これからは一ページぐらいは責任を持とうと思う。だが評判がわるければスグやめる。

★

「ボス」とは、原語では親愛をこめた表現として使われるそうだが、どうも陰険なひびきをもつし、テレビの見すぎか「ボス」とは、あぶらぎった好色の肥満漢を想起させる。ボクの知っているボスも、ちようどこんなタイプだったので、このように印象づけられたのかも知れない。

後輩にボスと呼ばれて親しまれ　清人

ボス的な存在ですと通知票　庸佑

このようなボスはほほえましいが、

人間のボスは一番先きに逃げ　弓彦

という奴が多い。しかしボスとなるまでには、ボスの身代わりとなって、からだを何回か張らないとそのポストはつかめない。

戦前のことだが、Aの場合は、自分の親分の悪口を云っているという風評を聞いただけで奈良へ行って、その二人をドスで斬り殺ろした。七年の刑で帰ってきたら、大阪市岡のある映画館の支配人として迎えられた。

Bの場合は、神戸で露天サーカスの木戸（モギリ）にすわっている時、地回りのチンピラが無料入場をしようとした。そこで争いとなり、Bは宿へ走って帰り、日本刀を抜き身でさげてきて、モノも云わずに一と刺しに殺してしまった。

Bという男は、大きい声でモノも云わないおとなしいタチだったが、親分が興行する五十銭の入場料のため殺人罪を犯かした。このBも五年ほどの刑で帰ってきたが守口で映画館の支配人になった。

いつも手を汚さないのがほらボスだよ　芙巳代

というが、AとBの親分はりっぱな人で、市岡や九条の繁栄をもたらした親分衆であった。ことにBの親分という人から、ボクが戦時中徴用されていた当時、親分子分でもないのに生活を助けてもらった。戦争に勝ったらこの親分から盃（さかずき）をもらうつもりだったが、戦争は負けるし、B29のために親分は爆死した。肩から足首まで見事な刺青（ほりもの）があった。一字も読めない人だっただけに、ボクが〝尖端〟という月刊誌を出していたから〝博士みたいな男や〟とオーバーにオダテてくれていた。

この親分は「高モン」といって、夜店商人からサーカスに至る露天業の大親分だった。戦争に負けても、この親分が生きていたら、ボクも一度や二度はクサイめしを食っていたかも知れない。

大ボスの過去へ棺も派手に立ち　天笑

ボクがいたとこは二代目だが、初代の親分が死んだとき、阿倍野斉場で前代未聞といわれる告別式があった。今里に住むある親分は中風で動けぬからだを両脇に子分にささえられながら参列した。が、翌日ムリがたたって急死した。義理と人情の世界の一端をのぞかせてもらったような気がした。

現在の親分稼業には〝人情〟なんてテンデないのではないか。堅気（一般の人）の一人を大ぜいの暴力団がよってたかってイジメなんて、戦前には聞いたこともない話だ。

チンピラはすぐにボスの名ちらつかせ　多久志

バックがないとなんにもできない奴らだ。

ボスの眼に積木くずれるのが見える　水客

真っ四角にすわってボスが悲しい日　六竜子

警察さえしっかりすればこの句のようなことになる。暴力団の復活は断じて許すな。

もうボスも限界を知る世の流れ　小松園

足腰が立つ間はこの心境にはなれない。

人妻

小浜牧人選

人妻となり倖せを聞かされる　千翁
人妻となり友情に変りなく　和宏
人妻となった師走の多忙知り　酔々
人妻に謎かけられてうろたえる　思月
人妻にうす紫の似合うこと　暁童
妊らぬ人妻犬を抱きたがり　英子
人妻を化粧に隠し夜の勤め　どんたく
人妻の膝の丸さに目をさける　古方
ホステスの人妻らしい思いやり　福子
人妻は和服でペタル踏んでくる　バット
人妻と上手に逃げるコツも知り　秀峰
同窓会一人ぼっちの嫁きおくれ　柳子
人妻の理性よろめきドラマ消す　梁水
人妻となって本当の美しさ　国彦
人妻の図々しさに目をそらし　芳子
人妻であるを今宵は忘れたし　露杖
人妻となり成人式へ行かず　無閑
ホステスの悲しい酒に乳が張り　芳仙
人妻となっても心の友として　初甫
人妻の好さが目につく倦怠期　扇水
人妻という常識が赤をさけ　止水
人妻となって諦められぬ過去　暁風
人妻となって噂の種をまき　春海
来年は人妻となる娘の寝顔　信二
誘惑も人妻さり気なくかわし　花子
猫の手となり農村の嫁になり　一治
人妻となった妹へ気兼ねする　杜月
人妻の胸にセールス棲みはじめ　峠
人妻になって別れてそれっきり　恵子
人妻と思えばいっそ美しい　暁明
露天風呂人妻だから面白い　松花
ひっそりと生きて私は人の妻　秋女
丹前を着て人妻の身を忘れ　十止庵
人妻となる日の誓詞聞いている　静歩
純情さ夫ある身と思われず　春日
前身はどうであろうと人の妻　利美
人妻となりゴーゴーは過去のこと　孜孝
人妻の微笑に心くすぐられ　佳女
と或る日の人妻浮気がしたくなり　失名
人妻の魅力単衣の帯を締め　文子
人妻のパートタイムにあるスリル　保夫
人妻へ心の距離をとり戻し　千翁

佳

人妻となれば便りもはがきなり　木魚
しあわせの自信人妻から匂い　仲美
人妻と知ってチップが惜しくなり　一郎
人妻となって女を失わず　一治
人妻にしてはミニミニ過ぎまっせ　伶人
人妻の経験があり良い仲居　バット

人

公害へ人妻としてマイク持ち　正朗

地

おんなおんなを人妻と見抜き　古方

天

共稼ぎ時に人妻らしからず　輝親

軸

人妻の濃い口紅は不貞めき

口笛

山田季賛選

口笛の吹ける日を待つ受験生　翁童
幼稚園口笛吹くのが一人おり　杜月
あの人の口笛だなと病んでいる　里風
口笛の軍歌満蒙偲ぶ父　素身郎
口笛を吹いてオーバーの襟を立て　初甫
口笛も軽く見合いの子が戻り　千代
口笛で出て猛犬に吠えられる　思月
口笛を吹いて夜勤の帰路につき　ろ亭
口笛も吹けぬ入歯の齢となり　春日
口笛で日曜大工出来上り　十止庵
窓下をたくみに口笛遠ざかる　隆子
口笛も吹いていいの日の軽い靴　暁風
口笛がデイト合図のベルになり　不酔

心地よい　朝口笛を　吹いてみる　祥月
口笛で　意思　表示する　反抗期　扇水
白樺の　霧へ　口笛　消えてゆき　章雅
口笛が　戻るほめ方　考える　千翁
口笛で　呼べばみんなが　振り返り　信二
アベックへ　口笛　しきり　建築場　花子
嘘のない　口笛だから　振り向かれ　寛
口笛で　会議　邪魔する　反対派　双楽
たくましくもぐり　海女の吐く口笛　城南
口笛が　今日の嬉しさ　知っている　秋月
口答え　せずに口笛　遠ざかり　葵水
口笛が　はずむ　競馬の　帰り道　一郎
口笛で　前行くミニを　ふりむかせ　利美
孫やっと　口笛　吹けるのが　自慢　正朗
佳
作業服　ぬぐ口笛に　明日があり　木魚
口笛に　まで老を知る　もどかしさ　軒太楼
口笛で　対話をにげる　反抗期　福子
はかどらぬ試歩だが口笛軽くでる　白汀
共学の口笛恋の唄をふき　暁童
人
口笛の　機嫌へ　鹿も寄って来る　酔々
地
だまされるように口笛聞いている　静歩
天
案外な口笛という隠し芸　古方
軸
工事場の　口笛に　秋の　空が晴れ

ピエロ

渡辺暁童選

サーカスの一座でにらえ効くピエロ　章雅
間を生かすピエロの芸になごむ小屋　どんたく
悲しみを秘めたピエロのトボケよう　佳女
バカになる事につとめるピエロの技　一治
失敗の仕振りがピエロ板に付き　バット
人生の航路にあったピエロ役　暁風
心の隅でピエロが踊る自己嫌悪　新之助
ピエロふと笑いの限界考える　軒太楼
才女今日ピエロとなって座をもたす　秋女
勤め終えピエロ背広で裏から出　代仕男
演出に無いのもピエロ笑わせる　保夫
泣き顔も笑いの種になるピエロ　松花
ピエロとも云われ会社の潤滑油　智司
小細工をちゃんと見抜いているピエロ　鶴丸
全身でピエロは俺の馬鹿を見せ　芳仙
失敗も演技の裡と言うピエロ　和宏
ピエロ或る日妙な商売だと思い　暁明
悲しい日ピエロ余計にはしゃいで　隆子
ピエロでもいいから筋はとおしたい　翁童
ピエロにはなれぬ若さが死を招く　十止庵
夕焼を背にしてピエロは面を脱ぐ　峠
ふるさとの舞台でピエロどじをふむ　思月
涙拭くピエロに楽屋裏があり　千翁
巡業のピエロ銭湯へもはいり　国彦
演芸会ピエロの服は母が縫い　初甫
すばらしい美人を妻にしたピエロ　素身郎
復職をピエロの椅子が待ってくれ　利美
人の目をさけてピエロのお昼です　葵水
ライバルへただのピエロとしか見えず　宵明
あまりにも本当すぎるピエロの眼　凡九郎
振り返りやとんだピエロになっていた　ろ亭
ボスの座へピエロ悲しい目を向ける　酔々
ポケツトに硬貨ばかりのピエロの瞳　静歩
佳
ピエロの目一瞬父の目に変り　正朗
空向いてピエロ本心とり戻し　福子
ピエロというすね方にあいてくる　古方
世の中をピエロが変えるかも知れず　白汀
この扉たたけばピエロが顔を出す　扇水
人
一つだけピエロか赤い柿がゆれ　止水
地
こおろぎにピエロ素顔を覗かれる　千代
天
笑わない顔をピエロの眼が捉え　仲美
軸
自他ともにピエロというが役どころ　翁童

★投句箋には雅号をお忘れなく。

（編集部）

初歩教室

——題「去」——

本田恵二朗

今回は久し振りに、初歩教室句会を開くことにする。私の手元に到来の全句を、句箋に清記して、無記名の状態で選をした。これは随分と手数のかかることだなと、思わぬでもなかったが、時には、こんな句会もあってよいのではなかろうか。句主は、それぞれに抜けた自句を、玩味したり、反省したりして欲しい。そこに必ずや得るところがあると私は確信している。

（一席）

無理にとは言わぬと無理を置いて去に　軒太楼

（二席）

過去に触れたがらぬ女よく喋り　為二

（三席）

夢去ってから平凡な日を愛し　止水

（佳吟）

明らかにせぬまま去就忘れられ　保夫
去にかける客を笑くぼで釣り戻し　比呂路
過去は過去今は今なり先きは先　まさひろ
立つ鳥があとをにごして出世する　孜孝
派手に口喧嘩してさびしそうに去に　三十四

（平抜）

滝を去る水瞬間の美を作る　止水
愛憎の去来に苦し恋を得て　綾女
訂正のきかぬ人生日日に去る　藤持
去に仕度した日もあった共白髪　仲美
現代っ子平和ムードに去勢され　保夫
押売りが去るまでよくぞ吠えてくれ　進
要領のいいのが決裂前に去り　軒太楼
会議また去年のことを蒸し返し　万竿
ワンマンに去勢されてる管理職　利美
去りぎわの言葉の謎がまだ解けず　杜月
めし食うてくるぞと勝った奴が去に　為二
来年の春にまたねと燕去に　静観堂
一人去り二人去る下手の長談義　繁子
去る者を追わねばならぬ求人難　賛平
去りぎわに残した味のある言葉　翁童
去り難き風情よろしく幕が下り　軒太楼
去る者は追わずと孤高がんこめく　洋敏
振り向かず去りゆく人の肩の巾　露杖
指繰れば去年にすべき七回忌　誓二
過去帖に父の名しるす薄い墨　翁童
鈴虫の声絶えのこんの夏去ぬる　頼次
去る者は追わずまたまた人探し　露芳
夫婦だけの番茶がうまい残暑去る　一二三
去年よりふえた古米に豚太る　藤持
去勢牛角に牡牛の名をとどめ　露杖
おやつよの声へママゴト飛んで去に　誓二
医師去ったあとに安堵の顔と顔　杜月
去ぬ去ぬと言い言い坐り直してる　シゲ
過去にのみこだわり出世せぬ男　比呂路
あばれほうだあばれて去んだ孫台風　万竿
一身上の都合で退職して嫁き　一二三
押売りをやっと去なして鍵をかけ　金三
去る妻に未練はないと涙ぐみ　綾女
スキャンダルの主の去就に町が割れ　新之助
過去ばかり覚えて今のこと忘れ　繁子
去る者は追わずまた来る春を待ち　濁水
お土産をもろたら孫は去ぬと言う　隼人
二次会へ捕まらん間に去んじまい　三十四
あばら家をよけて台風去んでくれ　久子
台風が去って釘づけもて余し　冨士
去る者は追わず未来の夢を見る　静子
秋風がさらえて去んだ千里丘　志津
隣の子おやつもろたらそっと去に　濁水
去年の今日の日記に気温問うてみる　露芳
泊る言うて来た孫夜中に去ぬとごね　三十四
今年こそが去年と同じ日記積み　孜孝
去る者があとをにごしてあきれさせ　秀村
去る者は追わぬ肚だが人不足　双楽
口達者人の噂を置いて去に　春海

最後の一句をとらえて、ちょっぴりと、勉

強をしてみることにしよう。
―人の噂―と言わなくても、―噂―だけで事足りるのではなかろうかと考えてみる必要がある。すると三音字だけ浮いてくれるので、その三音字を、なんとか効果的な表現に、当てようと考えてみる。―噂の種を―と言い換えてみると、どうであろうか。
（口達者噂の種を置いて去に）

鷲羽L・Cの歌

本田恵二朗 作詞
滝　弘太郎 作曲

（一）
わがライオンの旗じるし
鷲羽の山の松風に
勇みはためく雄々しさよ
ウィサーブ ウィ サーブ オー オーオー
ウィサーブ ウィサーブ オーオーオー

（二）
われら奉仕の合言葉
叫べば波も笑むがごと
鷲羽の山にこだまする　（以下同）

（三）
まなざし温し友愛の
尽す奉仕のあれやこれ
合す力に血が通う

（四）
五体に秘めし寛容の
歩巾しずかに行く男
胸のL字にある誇り　（以下同）

となったが、種といえば、蒔く方が面白くなり又適切ではなかろうかと考えてみる。
（口達者噂の種を蒔いて去に）
こうして練りに練ってみることが、作句の楽しさであり、面白さである。そこでまた、口達者を早耳がとすると、また味がかわってくるから、一層愉快になる。
（早耳が噂の種を蒔いて去に）

句材がちんぷであるので、佳吟とは言い難いが、作句練習の教材にして、つるし上げをやってみた。春海さんごめんなさい。

題―手―十二月二十日締切（二月号発表）

宛先　岡山県倉敷市下津井三五二　〒七一一
本　田　恵二朗

★ 化学火災

阿　万　万　的

我々の身のまわりにはプラスチックの製品があふれて来た。これは成型と着色が容易なために菓子器などの容器のほかコップ、バケツに至るまで一寸身のまわりを見渡しただけでも十数種類を下らない状態である。
そのほか、新建材のメラミン、ポリガポネード、塩化ビニール、それに衣類のナイロン、アクリル、ビニロンなど、私達の衣食住は化学製品にとりまかれているようなものだ。
しかし、この化学製品と云う奴、一旦火がつくと天然の素材より始末が悪い、たとえば断熱材の発泡ポリスチレン（石油系）は火の回りが早くて一酸化炭素の発生も多く、黒煙を発して中毒、失神に至らしめることすらある、また塩化ビニールからはホスゲン（毒ガスの原材）尿素系樹脂からは酸化窒素や青酸ガス、テトロンからは塩化水素などと全くもって物凄な話だが……。
美くしい色と形が燃えて窒息させる……何かを表現しているようだとは思いませんか。
華やかな恋にもあった落し穴

第二百三十三回（四十五年度第十一回）

大萬川柳

「曲　線」　入選発表

選者　清水白柳
投句総数　四百四十七句
入　選　五十二句

堺　草春
洗車するホースに水は逆わず
堺　一二三
ウナ電を抱く身へ列車又曲り
倉敷　克枝
曲線美秘めて尼僧の焚く枯葉
大阪　滋雀
川いまも曲りくねって見る歴史
倉敷　三林坊
提灯へ曲りくねった字が似合い
東大阪　肖二
ハイウェイ都心に画く曲線美
島根　正朗
曲線のある夢だから楽しくて
神戸　どんたく
鉄筋に住んで曲線が欲しい
大阪　明陽軒
曲線をたどるアミダに欲が出る
富田林　花梢

渓谷のカーブ地蔵に見守られ
富田林　東雲楼
曲線美女ならこそふりむかれ
藤井寺　吸江
ロケットに似てわが恋も孤を描く
高石　好郎
絶景より曲線気になる運転手
大阪　比呂路
酔っている証拠まっすぐ字が書けぬ
堺　青香
半円を描いて追越しする若さ
大阪　美房
ごね得を避けて高速迂回する
鳥取　佳女
人ごみを曲線に縫う帰路急ぐ
鳥取　鎮也
曲り道抜けて一ぷく吸いつける
京都　峠
曲線が少し気になる古い傷

倉敷　千翁
カーブから直線そこに検問所
大阪　十止庵
下降するグラフ売薬飲んでおき
大阪　章雅
曲線に紫煙が上る読み疲れ
堺　天笑
曲線美鏡の前で湯ざめする
風紋に添うて歩くも旅心
篠山　可住
曲線の先澄みきった空を持ち
曲線の筆致に菩薩笑み給う
米子　千代
癒えた子の頬曲線を取り戻す
頂上へ最短距離というカーブ
大阪　柳志
デザイナーの眼に風紋の美しさ
キャンバスへあきらめ切れぬ虹が消え
倉敷　里風
曲線美レンズ全開して盗み
曲線が大きく揺れたすり硝子
宝塚　ゆきを
曲線の短い手相気にかかり
減食ももうぎりぎりの曲線美
曲線美どころか平均台を落ち
大阪　水客
ライバル同士の視線カーブになっている
枝折戸のうごく通りにある落葉

西尾　栞　著
句集「水鶏笛」
送料共　六〇〇円

Uターンして人生を駆け抜ける
八尾　鬼遊
急カーブする値上りへミシン踏む
君狙うキュピットの矢がカーブする
曲線でおめでたの日をおしはかり
高槻　静馬
隣りまたかかったらしい竿しなう
曲線を描いて賽銭降るごとく
観光バスお喋りやんだ七曲り

佳　句

八尾　酔々
曲線の日本台風引っかける
倉敷　三林坊
さりげない曲線女髪を梳く
堺　天笑
ゴーゴーへ女曲線使いきり
岡山　止水
曲線の鉄路やっぱり北を指し
今治　宵明
自由演技チャフラフスカの線となり

人ノ句

大洲　暁明

線香の煙手向けのように揺れ
地ノ句　八尾　鬼遊

親切へ女ごころがカーブする
天ノ句　大阪　小松園

曲線のガラスに金魚逆わず
選者吟

弓の曲線その一瞬にある力

昭和四十五年度（十一月現在）

ベストテン

一	**水客**	二七、〇	大阪
二	**千代**	二四、〇	米子
三	**天笑**	二四、〇	堺
四	**好郎**	二三、〇	高石
五	**素郎**	二一、〇	堺
六	**鬼遊**	一九、〇	八尾
七	**三林坊**	一八、五	倉敷
八	**一二三**	一六、五	堺
九	**可住**	一六、〇	篠山
十	**里風**	一五、五	倉敷
十一	素身郎	一五、五	倉敷
十二	静馬	一五、五	高槻
十三	吸江	一五、五	藤井寺
十四	扇水	一四、五	倉敷
十五	柳志	一四、五	大阪
十六	花梢	一四、五	富田林
十七	暁明	一三、五	大洲
十八	ゆきを	一三、〇	宝塚
十九	芳子	一三、〇	島根
二〇	史好	一三、〇	松原
二一	新之助	一二、〇	大阪
二二	恵二朗	一二、〇	倉敷
二三	千翁	一一、〇	倉敷
二四	美房	一一、五	大阪
二五	酔々	一〇、五	八尾
二六	利美	一〇、〇	尼崎
二七	青香	一〇、〇	堺
二八	史朗	一〇、〇	八代
二九	鱗魚	九、五	岐阜
三〇	美代	九、五	富田林
三一	宵明	九、五	今治

以下略

昭和四十六年度第一回

「切手」　五句以内
締切　**十二月二十日**

第二回
「胃」　五句以内
締切　一月二十日

投句先
大阪市南区鰻谷仲之町二〇
郵便番号　五四二
川柳塔社内大萬川柳係

○大会のご案内は次号で発表します。

大萬川柳会の会則

一、本会は川柳に趣味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ、その技その覇を競い、柳界の向上発展と柳人相互の親睦を図るをもって目的とす。

二、毎月の出題並びに選は川村好郎氏が担当され、投句は一人五句以内、用紙は官製ハガキ。選句は到着順に一句毎に句箋に清記し、無記名のまま一連番号を附記し、順次混ぜ変えて選句する。

三、毎月二十日締切、出題及び入選発表は毎号の川柳塔誌上に掲載される。

四、左記の採点法により月々の得点を加算し、順位を定め、毎月のベストテンを発表する。同点の場合はその月の投句先着順とする。
天位　四点　地位　三点
人位　二点　佳句　一、五点
平抜き　一点

五、毎年十二月締切分から翌十一月締切分までを一年度として年度間の綜合点の成績に依り順位を定め、年度ベストテン把持者に賞品を贈呈し、大会の選者に推薦、懇親宴に招待す。なおベストテン第一位には特に梅里賞をもって表彰する。

六、本会の大会は毎年二月に開催する。本会の会費及び投句料は不要。但し大会の会費等は別に定む。

七、投句その他の連絡先は
大阪市南区鰻谷仲之町二〇
郵便番号　五四二
川柳塔社内大萬川柳係
＊電話での訂正や投句はご遠慮ください。

営業所
阿倍野店
堺　店
住吉店
平野店
都島店
今福店
十三店
九条店
credit system
丸越
本社　大阪市阿倍野筋3—15—1
TEL 632—3806　3807
買いよい
良い安い
月賦百貨店

柳界展望

あちらからこちらから
お便りを待っています。
（橘高薫風・担当）

▼麻生葭乃先生は、十月十八日から月末にかけて、西村梨里さんのところへ家事手伝いに出かけられた。近来お元気である。

▼生々庵主幹は十一月十五日南区医師会の秋のレク、京都の鞍馬山でてんぐ鍋に舌つづみを打たれた。編集部の一三夫氏と葉子さんも参加。なお主幹は大阪心斎橋ロータリークラブの会長に就任された。

▼ふあうすと十月臨時増刊号、第十五回句集、全国川柳作家年鑑は十月五日神戸市長田区五位ノ池町一丁目十、ふあうすと川柳社から発行になった。千六百八十六名参加の二百八十二頁もの大冊で、長年合同句集に取り組んでこられた橋本言也氏が綜合誌的な全国川柳年鑑への発展を目指し各有力川柳社の協力を呼びかけておられるのは注目に価する。送料共定価六百円。

▼噴煙九月号は噴煙創刊二十周年記念インターナショナル川柳誌上大会入選句発表号として九月五日発行になった。中島生々庵主幹も「予想」の選を担当された。

▼第二十回広島市短詩型文芸大会川柳部門は十一月三日午後一時から広島平和記念館第一会議室で開催。

▼碧南市文化祭協賛川柳大会は十一月一日午後一時から市内伏見屋生蓮庵で開催

▼「名古屋短詩型二十年のあゆみ」が名古屋短詩連盟二十周年記念事業として発行される。二十年間の優秀作品、審査員作品を収録した記念作品集で、A5版二百二十頁、定価八百円。名古屋市瑞穂区松月町二の二一、名古屋川柳社宛申し込みのこと。

▼平野青夜氏（札幌同人）が日本川柳社をおこされた

▼函館市文化祭協賛市民川柳大会は十一月八日（日）午後一時から函館市本町会館で開催。

▼川柳瓦版の会「飛鳥路を探る」吟行は十一月十五日（日）午前九時から、飛鳥駅前―猿石―橘寺―石舞台―板蓋の宮跡―飛鳥寺―甘樫の丘―橿原公苑事務所などを探訪した。

▼川柳しかご一九七〇年第一号は九月一日川柳しかご吟社から発行になった。また、川柳しかご自選句集が近く出版される。顔写真、私の言葉（五十字以内）出身地、氏名、年齢、現住所自選作品十句、送り先、野尻南海宛"1962 N. 17th. Ave. Melrose Park. ILL. 60160.

▼柳宴二百号記念「近詠」入選句が発表になった。

離農するバスを見送る赤トンボ　野田　正子

泣きに来た実家も母と義姉がもめ　曽根田たかを

ふる里をほめて頂くおすそ分け　岩田　峰鈴

▼第六回岐阜市文芸祭入賞作品（川柳部門）が発表になった。選者は野口北羊、清水汪夕の両氏。

▼全国鉄川柳人連盟事務局

代像　田中　一守

岐阜市長賞

家計簿が妻に教えた政治観　森　晴英

市教委賞

反骨も五十の坂という吐息　井川　昌英

▼川柳の町弓削が全国カラー放送に登場した。十月二十四日午後三時から四時まで「笑い」をテーマに朝日放送系のテレビ「ワイド・サタデー」で久米南町が川柳の町として紹介された。大阪の「漫才」、博多の「ニワカ」と「川柳」の三元放送で、弓削川柳社では「川柳寸劇」を上演された。

▼川柳やまぐち十月号は第十九回山口県川柳大会特集号として十月十日発行になった。

▼川柳たけはら十月号は第十三回近県川柳大会特集号として十月一日発行された

▼川柳孔雀五周年並に句集千羽孔雀出版記念川柳大会は十一月二十九日（日）午後一時半から久留米市商工会議所五階大ホールで開催

▼「こなゆき」誌の発行日が、昭和四十五年九月号から毎月一回五日発行と変更になった。

▼浜田久米雄路郎賞受賞句碑建立記念句会は十月十八日久米雄居で開催。寄せ書深謝。

▼清水白柳氏（大阪府同人）から「お申し越しの川雑系作家名句抜萃の件承知しました。かほる、艸楽、雅幽は山形市下条町五丁目七の十一、黒沢かかしへ引継がれた。

▼川柳「紋土」十月号は第二十二回西日本川柳大会号として十月一日発行。

▼「路」十一月号は中野懐窓作句生活六十年記念誌上川柳大会を掲載。

▼石巻市公民館落成記念川柳大会は十一月二十二日午前十時から石巻市公民館で開催。

▼雲仙句碑記念第十二回西日本川柳大会は十月二十五日（日）午後一時から長崎市国際文化会館で開催。

▼国鉄中村線開通祝賀川柳大会（中村市）は十月十八日中村図書館で開催。五十七名の盛会。若鮎会主催、高知川柳社、帆傘川柳社後援、寄せ書深謝。

▼第十二回北日本川柳大会は十月二十五日、八戸市更上閣で開催。五十名の盛会寄せ書深謝。

回天子川柳句帳（非売品）

発行所　佐賀県唐津市大石町二四八四・新岡回天子

丹路、愚陀仏名作家の句を改めて読み返すのは勉強にもなり、ありがたいことです。宇部の世面多留川柳社の誌上大会の選句『時の川柳』の課題吟の選句と矢つぎばやで忙しいことです」

▼工藤甲吉氏（青森市同人）は十月一日付けをもって東奥日報弘前支社長から紙面審査委員長に転じ、弘前の仮寓を引き払って青森の自宅に帰られた。国立公園十和田の紅葉もいよいよ本格的であると。十月十一日のお便り。

▼山陰川柳会は鳥取、島根両県下の柳人五十余名が参加し、本社から西尾栞氏が出席、尼緑之助氏と特別課題を共選。総合第一位に村松静歩氏、二位長岡鉄花人氏、三位古割舞吉氏。

▼高橋鬼焼氏（広島県同人）ビッコのままですが、やっと歩けるようになりましたと。

▼飛田好一氏（大阪市同人）は大阪断酒会の会員だが、朝日新聞の「仲間」に紹介された。

▼原独仙氏（島根同人）は胴巻という奇病に犯かされ一三夫氏の来松歓迎会に出席できなかったし投句も永い間休んでいたが、また投句をしますと。

▼不二田一三夫氏はラジオ大阪「奥様コーナー」の構成者として十月三十日付のサンケイ新聞に時事ミニ漫才を執筆。また新関西新聞の艶笑もののレギュラーとして活躍されている。

▼石曽根民郎氏（松本市）は十月六日から七回に亘り中日新聞文化欄に「私と川柳」のシリーズを掲載、古川柳、現代川柳を駆使して「木曽路をいく」「善光寺物語」「テレビとラジオ」など味のある随筆を執筆された。

▼山内静水氏（竹原市同人）は、十月十一日山陰大会に出席、栞、緑之助、竹原川柳会と縁の深い柳慶氏らに会い、帰途三朝温泉に一泊された。国鉄の大会で席題の選をされ、西日本川柳大会（弓削）、本社の同人総会、と相変らずのご活躍ぶりである。「花の町はなの心にもてなされ」

▼西出一栄さん（大阪市同人）は半年の入院、三カ月の静養の間、作句は思うにまかせず、最近になってやっとペンを持つ気になり、ぼつぼつエンジンをかけようと思うと。令妹の酒田清子さん（大阪市同人）は、入院生活五年になるとのこと。頑張って下さい。そして一日も早いご快癒を祈っています。

▼光好陽子さん（岡山市同人）の新住所は、岡山市中山下二丁目一の九〇岡山電報局内。

▼水粉千翁氏（倉敷市同人）編集の川柳道場は近く百号を迎えるので有意義な企画を考案中であると。

▼川端柳子さん（岡山市同人）は十月十日、十一日の連休に上阪、所用のため本社に寄らず失礼をしたと。岡山県総合文化センターでの西洋版画巨匠展など近頃はよく絵を見る機会もある由。「名画氾濫大菊小菊ふくいくと」

▼村田瓢太氏（大阪市同人）の主宰する関西奇術教室は生徒の数も増えて賑やかな教室となったが、十一月十五日（日）午後一時から大阪市南区長堀橋筋の福徳相互銀行本店八階ホールで第三回奇術発表会を開催した

▼河内天笑氏（堺市同人）は十月十八日松山へ。初めての四国は石槌山は霧で視界ゼロ。道後温泉で「伊予万才子　役の合の手が冴える」

▼八木千代さん（米子市同人）から十月三十日胃潰瘍を手術する薫風へ胃の妙薬だといわれる大根の画が届いた。おまじない程度には効くつもりとあるが、すぐにでも癒りそうです。

▼玉造川柳会は十二月十日午後六時開催。題＝揺れる　遅い＝特別宿題「片腕」会場は玉造交差点南一〇〇米大阪信用金庫。

▼堺・若芽川柳会は十二月十三日午後六時開催。題＝煙・約束・忘れる。会場は八木摩天郎居。

▼南海川柳会は十二月十七日開催。題＝着ぶくれ・しめくくり・忘れ物。会場はナンバ高架下、親和クラブ

▼南大阪川柳会は十二月十九日午後六時開催。題＝雑踏・もめる・ぎりぎり・計算。会場は松崎町二丁目、以和貴荘。

▼清水白柳氏（清）が十一月十二日午前十時十五分、市立桃山病院で急逝されたが、院長の本社の北川春巣医博がつききりだった。翌十三日に自宅で告別式が行なわれ、番傘、ふあうすと時の川柳、平安、川柳文学せんば（順不同）ほか多くの柳人が参列、故人を偲ばれた。

▼橘高薫風は十一月十六日大阪年金病院を退院。皆様ご心配をかけました。

本社十一月句会

会場　以和貴荘
七日　午後六時

十一月句会の特筆大書することは阿部柳太氏の柳話だった。

氏の本業である葬儀のうらおもて、そこには人生の最も厳粛なる瞬間がある。が、それを柳人葬儀屋さんは、巧みな話術をもって満場を魅了しつくしたのである。

「人間がいるかぎり、葬儀屋はヒマにならんから、お父さんのあとを継ぐ」という令息の話からはいっていく。

圧巻は、飯場の人の死で五、六人枕をならべて寝ているところへ行った柳太氏が

「ホトケさんはどこに？」

と、たずねると「オイ、みな起きィ！葬式屋ハンが来たぞ」

と、ゴロ寝をしていた人たちが起ちあがったが、一人だけ寝ている男があった。

「死んだのはコイツですねン」

話術の「ま」のとり方など、プロ級だ。月間賞杯は山田季賛氏。（河井庸佑整理）

出席―文秋・圭井堂・葛城・静馬・一舟・勝晴・古方・柳太・吸江・摩天郎・一三夫・百酒・花梢・柳志・滋雀・綾女・鶴翠・喜風・武助・たけし・操子・幸代・与呂志・杜的・万的・肖二・千万子・双楽・静歩・庸佑・一二三・形水・新之助・酔々・鶴声・つき子・金三・凡九郎・清人・禎三・瓢太・儀一・天笑・一治・重夫・史好・吉太郎・誓二・牧人・良子・小松園・凡吉・太茂津・鬼遊・宣介・白柳・幸雄・あいき・弥生・季賛・葉子

席題「サンマ」　**越智　禎三選**

サンマ食べ食べ公害のニュース聞く　杜的
サンマ焼く煙へ秋の暮れ易し　柳志
サンマいわくどうだ食えるか貧乏人　一三夫
レスビアンのようにサンマ泳いでる　静歩
サンマの詩庶民の口にのった頃　文秋
高くてもサンマはサンマ鯛は鯛　一三夫
サンマ膳に出すにも妻は値にふれる　万的
サンマの詩紀州は南受けた国　白柳
本坊も秋ですサンマ焼く匂い　酔々
この秋はサンマの煙たため露地　静馬
やりくりに迷いサンマの目と語り　滋雀
七輪で炭火で焼いてこそサンマ　太茂津
よう肥えたサンマですよと値を言う　白柳
サンマ見て海の蒼さの色で買い　一治
大根とサンマ我が家の味でよし　操子
家計簿に目立つ数字となるサンマ　百酒
塩サンマ半分にして妻の膳　白柳
サイラからサンマになって価が上り　吉太郎
来客を待たしてサンマ裏がえし　摩天郎
サンマ焼く匂いをよそに病んで居る　金三
オーブンに入れてサンマのあっけなし　静歩
やはり煙出して焼きたいサンマ　武助
半分にされるサンマへ食べ盛かり　花梢
値を聞いておやじサンマをもう言うず　静馬
マイペースでゆけばサンマも食べられず　よし子
夫だけにつけるつもりのサンマ買う　金三
換気扇今日はサンマへフルに舞う　滋雀
さんま食べすぎて返事もしてくれず　天笑
箸の先で痩せたサンマの値をつつく　宣介

席題「靴ベラ」　**阿万　万的選**

せっかちな人と靴ベラ知っている　文秋
靴ベラで常連背中どやされる　柳太
靴ベラへついでに菊も褒めておく　杜的
靴ベラへ踵の歪知って履き　金三
靴ベラと一緒に舌が出てきそう　新之助
靴ベラの空虚湯の香を背に出る　たけし
靴ベラが拗ねてるように二日酔　杜的
靴ベラを貸して無心をたしかめる　摩天郎
ポケットに靴ベラだけの月給前　吉太郎
靴ベラに何の鍵やろキーホルダー　誓二
靴ベラに安心ですワは熱のこと　摩天郎
靴ベラを出す女中にも上手下手　静馬
ささやかな抵抗靴ベラポンと投げ　酔々
靴ベラを秘書はすかさず出して待ち　綾女
値切ったら靴ベラだけをつけてくれ　鶴翠
靴ベラをキーホルダーに独り者　静馬
鼻唄でゴルフに出て行く靴すべり　花梢
靴ベラと硬貨のほかは皆すられ　天笑
靴ベラを渡す妓の匂う袖　与呂志
電話聞くのに靴ベラを持ったまま　白柳
靴ベラを渡されてから名を尋ね　吸江
靴ベラへドカドカドカと旅の客　摩天郎
靴ベラまでチップが効いているなと思い　柳太
靴ベラへ酔うて仲居の肩を借り　金三

靴ベラを出し挨拶の長いこと　牧人
アイデアが浮んで靴ベラ握りしめ　儀一
靴ベラのいらぬ靴はく工務店　白柳
靴ベラへふとふと自分意識する　凡九郎
心よく金借りました靴すべり　酔々
腰曲げて履く靴ベラの長さだけ　葛城
おつりくるまで靴ベラを握りしめ　天笑
靴ベラを片手に受話器まだつづき　小松園
ハンカチと出た靴ベラへチト慌て　金三
靴ベラの医者ふり向いて話すこと　万的

席題「陸橋」　**岡橋宣介選**

来山は何んと詠むやろ陸の橋　摩天郎
陸橋のミニが気になる彦九郎　鶴翠
陸橋になって二代目職を変え　新之助
髪が気になる陸橋に風がありたけし　肖二
陸橋へ来て引きかえす乳母車　勝晴
陸橋の上で阿呆がほざきおり　一三夫
生きのびてこんな陸橋わたらされ　あいき
陸橋へ人間様が追いやられ　清人
陸橋にもたれ青春悪企み　勝晴
夜更けの陸橋でもつれる疑惑の人影　操子
陸橋から夜店の景気見てかえり　一治
陸橋で約束をして地下で会い　禎三
陸橋で都会の恋が咲いている　太茂津
陸橋を歩き秋空高いこと　たけし
陸橋を渡れば救急車が走る　与呂志
陸橋を登る老母の後につく　凡九郎
自動車がお通りになるぞと言う陸橋　万的
海見える陸橋絵になる色で暮れ　滋雀
陸橋に没り日眺める里心　操車場の陸橋貨車は生きている

思い出があり陸橋の上で会い　良子
長い陸橋俺にアリバイがないたけし
借りにゆく陸橋の下の灯の渦よ　宣介

兼題「ラッキー」　**児島与呂志選**

ラッキーを摑む両手は皆んな持ち　葛城
婆抜くと言わない嫁を探り当て　誓二
ラッキーな雨よ二人に傘一つ　吸江
ラッキーでしたと努力を口にせぬゆとり　一二三
ラッキーなことに雲間に富士が見え　庸佑
ラッキーな奴が味方に一人居る　扇水
ラッキーなパンチでしたとインタービュー　凡吉
うちの子がラッキーセブンへ三振し　静歩
解説もラッキーセブンに興奮し　肖二
目に見えぬラッキーこちら向いてくる　金三
ラッキーな当りくじからケチがつき　静歩
ラッキーをベストつくした手で摑み　牧人
前祝いラッキー不安の借りが出来　一治
ラッキーと殊勲語らず汗ぬぐい　章雅
敗将をかばいラッキー強調す　たけし
インタービュラッキーでしたと唯一語　杜的
ラッキーな奴だと力量には触れず　百酒
ラッキーが狂わしてしもうた人生　凡九郎
よかったよかったとゴミ箱から見付け　滋雀
延着証明の列に朝寝坊もまじり　一二三
ラッキーがきっと待ってる空の青　一三夫
ラッキーだったとは自分に言い聞かせ　金三
破顔一笑ラッキーでしたと男　与呂志

兼題「二泊三日」　**傍島　静馬選**

二泊三日スリル有り気に言う幹事　旅風
二泊三日やっとなじんだ湯を惜しみ　藤持
二泊三日程良い客で惜しまれる　瑞枝
鼻声に二泊三日が足を出し　野迷路
出張の二泊三日を怪しまれどんたく
二泊三日銀婚面映ゆそう帰り　章雅
乗って乗って二泊三日のスケジュール　虎声
二泊三日夫のよさが判りかけ　摩天郎
二泊三日新婚気取りして疲れ　維久子
予算なく二泊三日のハネムーン　双楽
二泊三日今度はオジを殺して出　新之助
二泊三日に夫が気になる里帰り　つき子
肩の凝る二泊三日の講習会　勝晴
二泊三日旅の便りが後で着き　吉太郎
根が生えた二泊三日のポン・チ・ロン　酔々
晴れ晴れと二泊三日のサツを出る　滋雀
老夫婦二泊三日がよいところ　吸江
二泊三日旅にも発てぬ鳥を飼い　柳志
二泊三日いずこも同じ玉子焼　一舟
三日目は一気に帰るバスツァー　葵水
新夫婦二泊三日で仮面はげ　酔々

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五一 — 四
夜間 (762) 四四〇八

蒸発も二泊三日という予定　天笑
ハネムーン二泊三日でもう敗かれ　滋雀
子等寄って二泊三日のプレゼント　圭井堂
二泊三日あれこれ頼んで妻出かけ　瓢太
二泊三日どこで何をしてたやら　一三夫
儲かって二泊三日の慰安会　肖二
二泊三日タオルに湯の香まだ残り　柳志
二泊三日帰りになって青い空　花梢
外国へゆく程二泊三日の荷　葵水
二泊三日ブレーキかける妻が居り　静馬

兼題「免許証」　**大坂　形水選**

免許証も祝盃だけは断れず　扇水
免許証息子の方が先にとり　芳子
遠乗りの許可がまだ出ぬ免許なり　瑞枝
免許証に自重自重とささやかれ　葵水
免許証オールドミスにしてしまい　操子
助手席に坐り気をもむ免許証　白柳
トラクター嫁の免許が役に立ち　白柳
荷ざかりへやっと間に合う免許証　あいき
免許証とって一言多い妻　花梢
運転免許取ったらよそで働く気　静馬
免許証とればさっさと辞めてゆき　鬼遊
免許証素早く見せて突走り　維久子
簞笥の中でまだまっ白な免許証　古方
免許証貸して結構食うていけ　静馬
生活がかかり無事故の免許証　牧人
免許証は取られ車はへこまされ　一二三
免許証取って乗せたろか乗せたろか　どんなく
無造作に没収された免許証　勝晴
免許証女はひとり強く生き　一三夫
女房の免許で商売派手にやり　小松園
気まぐれな免許で娘アルバイト　花梢
免許証返上自転車で走り　たけし
免許証持って駈引強くなり　白柳
免許証紐までつけたにまた落とし　柳太
免許証のかげに巣食っていた汚職　一二三
免許証取って車が恐くなり　形水

兼題「本　心」　**戸田　古方選**

本心のとおり動いたい疲れ　芳子
本心で握り返した手がしびれ　正朗
本心は茶筅持たない方の手に　旅風
呆けたように見せるは年輪のずるさ　静観堂
本心を見せぬ襟足美しい　明陽軒
本心を言えないままにいちょう散る　明陽軒
眼力はその本心をもう見抜き　庸佑
声となる言葉はいよいよ本心から離れ　凡九郎
親友に女の本心さぐらせる　肖二
やっぱり生きていたいほど思われても人間やから　凡九郎
本心はそれかとくどく念を押し　章雅
打ち明けてみればおなじ夢を持ち　滋雀
本心をあかせば女よそよそし　良子
本心がつい茶化されるネオンの灯　武助
本心は踊って見たい笛を待ち　柳志
本心はともかく上手に世を渡り　季賛
本心は言わでも判って共白髪　百酒
本心は聞いてやりたい子の躾　花梢
本心を言えばもつれて来る気配　千万子
辞表書く気の本心を見込まれる　清人
そうだったのかとうわ言で知り　圭井堂
本心は本心はとみなんでか問いつめる　凡九郎
本心を見られてからのおどけ顔　武助
えげつのうなって本心やっと知れ　文秋
本心を孫に少さく聞いてみた　千万子
墓地の空の青さに本心見すかされ　万的
負けて勝つつもりの妻に歯がたたず　一舟
本心がはっきり言えるよい身分　季賛
かくせるとこにある本心は知れたもの　古方

★

▼**大萬川柳について**

▼清水白柳氏の急逝で四十六年度新年号分は中島生々庵主幹が選をされます。

▼二月号発表分からは川村好郎選になり、投句先きは川柳塔社大萬川柳係に変更。

▼投句は本社が清記して川村好郎が無記名のまま選句、選者が交代しただけで規約その他は従前どおりです。

大萬川柳会

路郎忌川柳大会

昭和四十六年七月十一日（日）

会場　御堂会館（南御堂）（電話二五一・五八二〇番）

大阪市東区北久太郎町四―六八

位置　地下鉄本町南出口より南へ二百米

川柳塔社常任理事会

十一月四日六時から本社で常任理事会がひらかれた。議題は来年が路郎先生の七回忌にあたるので、主幹からプランなどの説明があった。

まず準備委員をつくることである。これには今日出席の人たちも参加して、若本多久志氏をチーフに、川村好郎・西尾栞・北川春巣・菊沢小松園・戸田古方、大坂形水・傍島静馬・不二田一三夫諸氏が指名された。またこのほかに数氏が参加される予定である。

これらの具体案は十二月の理事会で決定され、新年号で発表のはこびとなる。

出席―生々庵、静馬、古方、栞、一三夫諸氏。

★柳界短信

▼平野青夜氏（札幌市同人）は昭和四十六年元旦を期して、月刊〝にっぽん川柳〟毎月一日発行―を創刊されることになった。〝空前絶後の新しき川柳誌遂いに現わる〟というキャッチ・フレーズで柳界に打って出るわけだが、発行日は十二月上旬の予定。一部一八〇円、送料三五円。半年一〇八〇円、一年分二一六〇円ともに（〒共）体裁はB5判、一六頁。振替小樽一一五三九番。札幌市北大通西九丁目三の一五、平野青夜方、日本川柳社。

▼山内静水氏主宰の〝たけはら〟十一月号は岡元春舜氏の川柳塔賞準優秀作第二位受賞記念号として発行。

▼尼緑之助氏（出雲市同人）は十一月一日茸狩り句会としゃれこみ、内輪だけの独仙、柳慶、河南、草丘、緑之助諸氏が山の秋を満喫された。

▼川柳塔まつえでは秋晴れの一日を安来市清水寺へ吟行、祥月、晃男、鶴丸、通児諸同人ほか、米子の千代さんらが多数参加された。

▼越智一水氏（今治市同人）は全国郵政川柳大会が高松で開かれた際、十月二十四日の前夜祭、二十五日の総会と句会、二十六日の観光案内と大わらわだったが、一年前の計画が実行にうつされホッとされた由、今年も理事として活躍するとのこと。

▼有信新之助氏（大阪市同人）は、晩秋の一日を丹波方面の紅葉に編集部の一三夫氏と葉子さんをドライブに誘われた。

阿万万的・松川杜的共著

序文　中島生々庵主幹・正本水客氏

句集「的」

感じの句をもって新風を送る万的・杜的のダブル「的」は本誌でもおなじみのものです。優雅な日本画を見るような川柳が全ページを彩どります。

一月中旬発行
送料共　四百円

発行所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇　川柳塔社

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から一〇〇〇〇円迄

大阪・東京・京都3店に共通です

大阪・なんば・日本橋条
東京・四
京都・

高島屋

南大阪川柳会　金井文秋報

風の私語　私の思慕をかきたてる　花梢
敵意ある眼だと仮面でも解り　恒明
つるばらは不仲の垣根越えたがり　千梢
この人へ心の垣根枯れて来る　美代
筆まめに母から来ますひらがなで　一栄
デカンショで帰る夜道は敵は無し　滋雀
棘のある言葉を投げる垣根ごし　小松園
世渡りのひょっとこ面を持っているルール知る良い子に高い歩道橋　形水
住む人は好かんが垣根見に廻り　文秋
赤い羽根つけて良い子という誇り　一舟
子をあやすホステス仮面ぬいでいる　酔々
思慕のせて車のカーブゆるくなる　綾女
手紙だけ不思議にまめに書いてはる　白柳
良妻が手に持つ魔女の仮面にて　古方
クラス会あだ名へ思慕がよみがえり　肖二
一人寝の夜は仮面の目も光り　柳志
総会に仮面を変えて出る社長　あいき
夜道の寂しさに女を意識する　新之助
智子
七人の敵へ仮面の色も変え　君子
垣根だけ自腹月賦の家に住み　一治
思慕の情明かせば恋の遠ざかり　儀一
ニコニコと坊やの機転に署長さん　誓二
自分だけよい子になって放っとかれ　金三
垣根越し中たしかめて戸をたたき　好一
仮面着たお人に国民踊らされ　鶴声
児に詫びる菓子折り揺れている夜道　一二三
竹垣をブロック塀にして不仲　静馬
拗ねて出た夜道みじめな影を連れ　千代
失言を取り消す顔を別に持ち　虎城
結婚反対親の垣根も二十才まで　章雅
仮面のまま泪を見せていた不覚　葵水

玉造川柳会　西出一栄報

市場中歩いて男は買い迷い　鶴声
一盛と成程盛っては　ありました　凡九郎
もう一つ叩くバナナを待って買う　鬼遊
退院の足もとかばう運転手　白柳
足もとへお師匠はんの眼が光る　形水
幸福に酔う足もとが崩れそう　雀踊子
足もとで老いの子守をてこずらせ　誓二
未だわしは酔うていないと千鳥足　一舟
台風の被害はどうかと見舞状　竹青
被害者も叱られている交番所　一二三
被害者の無欲を取り巻き歯痒ゆがり　静馬
入智恵をされて誇大にする被害　滋雀
被害者を祈り見送る救急車　儀一
被害高エスカレートする銀行　綾女
被害者の心になって詫びを入れ　好一
医者の被害うかうか接種しておれず　肖二
被害ののうなる法律てこれかいな　古方
パトロンの倒産バーを道連れに　葵水
悔しさは樟脳忘れた虫の穴　一栄
会社でも潔癖私用の湯呑みもち　章雅
話好きプライバシーにふれてくる　柳宏子
少々の私用は課長目をつむり　文秋
公私共ネクタイ曲ったままで居り　虎城
公害は反対だけど自動車は買う予定　頂留子
生産の音高らかに害を撒き　新之助
公害の事は忘れた露天風呂　静歩
汚染牛乳吸う児の瞳清らかに　君子
公害は知らない過疎の樽みこし　芳子
三カ日空青けれど川黒し　弘生
公害に耐えた銀杏の実が落ちる　智子
未来図の日本ゴミの上に浮き　富久一
朝顔の寿命縮めた排気ガスあいき

富柳会句会（富田林市）　阿部柳太報

小説を地でゆくようなくらしよう　清涼
小説を夜を日にたして読みふける　朝
小説の女人はみんな哀れなり　宏子
小説家ネタを漁りに飲み歩き　双楽
直木賞獲る気ぼんち後継がず　静馬
ファンレターのせて小説売り出され　柳太
テレビ小説休みで妻は起きて来ず　摩天郎
回転ドアー又も出口にほり出され　美代
自動ドアーよろめく心見抜かれる　花梢
仲人がいやで話に気が乗らず　吉太郎
気乗りせぬままに汗拭く野良仕事　維久子
気乗りせぬようだと仲居座を外し　白柳

堺・若芽川柳会　和海草春報

訪れてうれし涙か師もお年　千万子
久々の訪る友の愚痴を聞き　摩天郎

なき父の半面を聞く墓参の日　青香
心中沙汰半面だけで批評され　双楽
完全な妻になりきる日の自覚　草春
完全な帳簿へ不信ついて行く　柳信
完敗の友へ言葉は止めておき　つき子
新婚旅行もう完全に敷かれて居　一二三
徳利からなみなみ頂く初詣　誓二
末席に徳利溜るも酔いもせず　藤持
徳利持ち上げて返事又にごし　宏子
女房に注いで徳利の催促し　清涼
徳利を憎めぬ妻の白い髪　筑前
中年の魅力ぬか味噌茄子の色　春子
徳利の底がたかいとからんでる　敬三
中年の恋先ずソロバンを弾いて見　静馬
中年から倖せですと云う八卦　徳子
ああもしたいこうもしたいで四十すぎ　茂美
ネクタイの彩に中年賭けてみる　夢成
アイシャドー中年かくしているつもり　好郎
完全にしかれてますと悪びれず　美代
半面をあばくテープが廻り出し　天笑
御指名が帖場通さず出す徳利　小松園

富柳会句会（富田林市）　阿部柳太報

宿題の虫集めにも母がいる　維久子
帰り来ぬ子を待つ夜の虫の声　朝
虫までも故郷へ帰れと鳴く飯場　柳太
高度成長高価な犠牲が支払われ　六竜子
支払いの酒代デート代になりました　紅月
支払日居留守を子どもついしゃべり　双楽
支払うて功徳したよな顔でいる　摩天郎
支払いの悪さへ商人線をひき　宏子
公害に負けた身体に子がすがり　凡吉
公害がミニのひざまで黒くする　美代
公害も世界に負けぬお国ぶり　静馬
公害に社の発展が伸び悩む　花梢

どんぐり川柳会（羽曳野市）　川村好郎報

原稿紙一字も書いてないひる寝　酔々
慰めがもう泣き声になりはじめ　吸江
本腰になれば女はそっぽ向き　一治
イメージとは遠い夫といて平和　桂馬
命日の線香にイメージ揺れている　武吉
声かけてみたい女と汽車の窓　光影
ふるさとのイメージ帰省のたび壊れ　吐来
行く雲のイメージと遊ぶ病床なり　明治
名所並み大臣産声上げた家　一歩
虫の声バックに野辺の恋すすむ　岳太
うとうとと昼寝したとこブルドーザー　友恵
弱り目にたたり目腰が痛み出し　伊都恵
イメージが消えず再婚踏み切れず　好郎

どんぐり川柳会（大阪市）　川村好郎報

大物を洗う検事の細い首　酔々
洗いもの積んで教育ママの留守　弥生
満たされて愚連隊から足洗う　勝恵
今日も又洗わぬ仮面つけている　比呂路
じいさんの肌着は嫁に洗わせず　静波
喜びや哀しみ嫁ぐ髪洗う　鬼遊
甲斐性なしやけど夫のシャツ洗う　天笑
後影追うまい別離かみしめる　凡子
淋しさに耐えてうしろを見ない意地　鶴翠
ライバルにうしろを見せている煙草　虎声
羨望の視線のうしろにある嫉妬　河産
洗う物小わきに豊かなる饒舌　修史
締めくくりやっぱり万歳する明治　草春
芋洗うごしごし文学には遠し　痴亭
洗う度心が痛む髪が抜け　一治
洗い物させても娘恩にきせ　生長
うしろめたい恋だからよけい燃え　岳太
うしろ髪ひかれながらも故郷を捨て　つき子
これしきの事にと思ううしろ指　之保
鉢巻を締めてタタキの声になり　喜風
締めてから赤字と知って慌て出し　儀一
仲人を又呼びに行く同居好郎

まるべに川柳会（大阪市）　川村好郎報

ネクタイを替えよう今朝は秋の風　立児
欲望は尽きなし文珠の千羽鶴　一世
もうロングはいて流行追うも秋　泉睦
雲間に昔の青い空まだあった　寿子
当分は見舞の玉子ばかり食い　瓢太
千羽鶴折らないうちに退院し　幸子
お見舞に通うた仲で恋実る　茂児
子が出来て同居の危機が救われた　節子
思い出の海は波立ち夏去りぬ　信代
昔日の落書訪ねる家原寺　星斗
帰り畔稲穂の招きに立ち止り　閑子
少年の目にふるさとへ走る雲　好郎

むらくも川柳会（島根県）　藤井明朗報

一枚の証文大事なものをいい　秀子
くじ運のいいのが一枚もっていた　正朗
鰯雲減反最後の稲を刈る　勇
釣糸を一緒にのぞく鰯雲　芳子
師の便り苦言もそえて励まされ　さちえ
逆ってみたが苦言に含む味　一郎
親友の苦言自己をとり戻し　芳枝
教養の一つへ苦言きいており　文子

噛みしめて部下の苦言をききいれる　澄水
親なれば こその苦言が 遠くくる　福子
中途から 涙も混じって来た苦言　白汀
友の苦言 素直に聞いて あきらめる　明朗
忠告も 苦言も みんなうわの空　祥月
一枚の名刺へこめる お人柄　孝華

ウイロー社（ハワイ）　林　明春報

モデル嬢 夕餉は母と お味おつけ　拝山
濡れすぎたモデルと知りつつ秘しまま　三石
絶景へ妻をモデルに切るシャッター　万里歩
モデル嬢 女女の眼がいたい　カロ女
おしみなく脱いでモデルというポーズ　峯円
理屈ぬき ただ経験で暮し立て　暁舟
経験をたてに父親意地をはる　泉水
出戻りへ よい経験と母ゆるし　魔花麗
経験を生かしてソツのない男　浮草
何もかも知ってる女すねて見る　雪女
経験談 又かと平は聴いて居ず　快夢起
モデル嬢 映画スターの座をねらい　蒼蛇楼

備前川柳社　目賀芳月報

祝電が夜露にゆれる 目出度い日　飴ン坊
すばらしい恋が歩いた露の道　伊久野
黒枠の葉書に露の命消え　胡風
夜露は毒と今夜は帰えさぬ気　一声
朝露を踏む倖を子は知らず　芳月
満月を割るのが惜しい露天風呂　宗郎
露草をふめばこうろぎさっと止み　正州
恋猫が夜露にぬれて今朝もどり　柳子
輪に吹いた煙動かず片想い　草二
青い麦勝気な妻が刈り初め　幸仙
無い袖を振って見せると言う勝気　三与子
寄付金へ女の勝気が見栄をはり　秋月
ビニールを敷けば露でもよい二人　明良
空っ風稼げ稼げと吹きまくり　久米雄
朝露にぬれて精農飯にする　芳明

高知川柳社（高知市）　川竹松風報

浮気には浮気で返す武器をもち　素子
浮気する度胸が欲しい四十すぎ　未遂
浮気から本気になってからがもめ　紅雨
明らかに寝言で聞いた女の名　日向雨
友達の浮気見て見ぬふりをする　芽十
よろめきの旅乗る駅を別にする　青果
夕暮れをたがい違いの共稼ぎ　桂緑
夕暮れへまだわびぬ子が立ち続け　一両
ギャンブルに負け夕暮へ重い足　松風
大仏のように座っている無口　伊津志
成績はいつも主席で無口な子　柳水
無口とは承知で添うて物足らず　美知
独身の気安さ何時にかえろうと　勝子
尼僧ふと枕をぬらす夜を憎む　寛
倖せと寂しさ同居して独り　亀野
失った恋が生きてまた独り　伸
独身のまま年式が古くなり　晴水
独身の作者がえがく夫婦愛　忠重
良い人が出来て独身寮を去り　三平

こまつ柳壇　山上千太郎報

録音器埋もれた唄を採り歩き　城南
熱戦を語るマイクの息づかい　芳朗
ヘドロ禍の怒りマイクへ叩きつけ　弘実
録音に合せ手拍子天高く　冨美子
昼飯に録音が云う今晩は　信子
録音の中に記録になる談話　松水
終戦の録音青年の無表情　きみ子
開票の結果に惜しい同志打ち　魚山
客同士嫉心のある美容院　なお江
隣り同士なに話してる鬼瓦　芳朗
俗人が集団つくって悪をなし　吉枝
同志だけ残り赤字のことで飲み　城南
男同士ネオンの秘密かばい合い　きみ子
故人には申し訳ない茶碗酒　弘実
新盆へ故人ふたたび記事になり　柳児
鮮やかに故人の柿が実る秋　香径
天国の政敵ほめる改選期　正柳子
似顔画に故人を偲ぶ秋の冷え　茶仏
酔うにつれ故人を思う飲み仲間　革刃
写真に語り合う独り居の冷奴　たつ路
笑うてる写真この世で逢えぬ顔　千太郎

川柳わかやま　垂井葵水報

避けられたこと意識して悲しい日　佐知子
金借りているので僕の目を避ける　守夫
人前を避ける遺伝が子にも見え　十郎
避けようとする程眼と眼が会うも　盛太郎
死んだ子の話題避けてる老夫婦　太茂津
誘惑を避けた女の木の葉髪　公作
避けて見てむなしさを知る夫婦仲　千寿子
人間とは何かつくづく時計見る　陽一
几帳面妻をもらって角がとれ　泰子
瓶出してくずやがほめた几帳面　ふみよ
仏滅も生理も避けて日取り決め　城石
団交に入り交差点さぐりあう　葵水
思慕避ける眼となりいたり邪心持つ　白柳

川柳まばたき　出原敬一報

老朽の軒で昼寝の女郎ぐも　不老

風鈴をひとり聞いてる軒忍草　天禄

冷暖房末娘の家に軒がない　黙堂

初盆の燈籠大きく瀬をよぎり　妥子

たばこ盆祖父の気性に叩かれる　草加

ゴーゴーの娘等じれったい盆踊り　望

盆正月ない浪人の子をかかえ　みどり

流燈へ親一心に弥陀となえ　敬一

華やかな船出のテープがはなれない　文子

添い寝して足のはみ出す枕がや　柳風

過去流す雨は男の音で降り　康明

軒に巣を残してつばめ遠く去り　まさ代

たけはら川柳会　蘭幸報

手のひらに太陽しみじみ思うこと　笑子

鳥啼いて飛べり私に翼がない　のり子

青空を支える雲のない不安郷愁　つんぼになっているから平和不動

近眼の便利初老になって知り　大陸

昼寝から覚め夕立があったらし　野人

駄々っ子のように老母がひきとめる　操子

退け時のパフ叩く子の忙しい　季賛

家の前まで来て引返す片思い　日出夫

反問が心の壁へはね返り　泉

振り向けばやっぱり妻は佇っていた　鬼焼

セールスにつられ魚拓も出してみせ　英詩

開運の鐘なり響く大山寺　浄美

夜行での疲れを川柳が忘れさせ　義次

排気ガスあれほど浴びてそよぐ雑草　一路

泥くさい妻と苦労の続く日々　雅鳳

万博から帰りくつろぐとこがあり　康宏

秋の雲ひとのこころをとみにかえ　不朽

お見合いのうまくかくしたコンタクト　延子

定年の疲れ制服脱いでから　清太郎

玉をとる子猫とうとう捨てそびれ　静志

べんちゃらを言う友人の薄っぺら　春昇

注射針まだ赤ちゃんは恐がらず　そのみ

蛾の不覚見慣れた雲の巣へかかり　菁居

聞き役のマダムも憂さのあるお酒　路秋

アイシャドーいわく恋なんて恋なら　蘭幸

しお味がきいてる父のおみそ汁　洋子

気にくわぬことにも耐えマイペース　美佐雄

妻をどなり胸のつかえをおろす日よ　政己

上を見下を見心のネジしめる　房子

夏バテもなく食欲の秋となり　静火

コスモスよ主なきとて咲いてくれ　静水

どの花を好いて鳴くのか秋の虫　遊心

竹原の句会懐かし薬草履　彩峰

民主主義平和な村が崩れかけ　松緑

思慕の情断切るようなにわか雨　天石庵

アルバムの一枚抜けた淋しい日　白柳

雅号ぶっちゃけばなし　(79)

今西　章雅・

いまにし　しょうが

昭和三十三年ごろ伊達堰子さんと故木村十悟さんから薦められたのが、川柳に這入ったきっかけです。以前の雅号生薑（しょうが）は生姜の漢方薬名で俳号に付けたのですが、そのままでは固いので川柳では「しょうが」と読んでいました。

当用漢字から嫌われたので同一発音の章雅に変え現在に至っています。共に趣味の姓名判断で付けた頭領運のある雅号ですが、

天ぷらのつまなら生姜色も良し　自句

の通り一向天ぷらに成る程上達しません。だが自分なりに定義した「川柳は人間の愚性を追究する十七字詩」と云う考えを堅持して、今後も川柳を作り続けるつもりです。　**今西頼光　薬剤師（六十三才）**

社告

清水白柳氏の急逝により、新年号発表分の「九輪抄」は、菊沢小松園氏に代選を依頼しましたが「九輪抄」は新年号かぎりでおわりといたします。

大萬川柳の選者が川村好郎氏となり、その投句先きは本社宛となりました。

川柳塔社

川柳塔社忘年句会

日時　12月7日（月）　午後六時

会場　以和貴荘（いわきそう）
阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

兼題　柳話　若本多久志
「もみ手」　阿部柳太選
「トンネル」　西田柳宏子選
「白羽」　本多柳志選
「推理」　西尾栞選

席題　三題　当日発表

会費　二百円　　各題三句

★投句だけの方は切手50円封入
★電話での投句はご遠慮ください

大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社
電話大阪(271)3985番

1月の兼題　「家」「リズム」「群衆」「年輪」

二月号は白柳追悼号

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵　選
—自選は四句以内—

募集

近作柳樽（10句）　北川春巣　選
課題吟（各題5句以内）
「白」　柳楽鶴丸　選
「おんな手」　内藤きさ子　選
「アイロン」　河村日満　選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

三月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵　選
—自選は四句以内—

近作柳樽（10句）　北川春巣　選
課題吟（各題5句以内）
「ビニール」　宮口笛生　選
「理想」　松川杜的　選
「美談」　池田古心　選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

定価　百八十円（送料六円）
半年分　千百円（送料共）
一年分　二千百六十円（送料負担）
昭和四十五年十一月二十五日印刷
昭和四十五年十二月一日発行

編集兼発行人　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大陽印刷株式会社
郵便番号　五四二
発行所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　川柳塔社
電話大阪・二七一三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

70年の年輪が生む
国際銘柄サントリー！

〈ウイスキー〉 リザーブ2,700円・オールド1,900円・角瓶1,450円
〈ブランデー〉 V・S・O・P2,400円

サントリーの洋酒
Fresh サントリー《純生》

・ペンペン草・

★〝秀句抄〟は同人の部五十句と、一般の部三十句にとどまった。中間発表の句を省いたほうがよいということでけっきょく八十句だけになった。

★川柳は下五で勝負する。上五、中七で、せっかくいいものを摑んでいながら、下五でコトをこわしている作品が多いようにおもう。

★これは下五を安易にくっつけるからだとおもっている。（あえて作るとは書かない）いま頭に浮かんだものから書きならべてみよう。フト思い・ホッとする・あわてよう・忘れられ・はばからず・ためらわず・ありったけ・云いそびれ・あなどられ・それっきり・云うとれず・さからわず・かも知れず。ETC……とくに〝さからわず〟と〝かも知れず〟は常とう語の両横綱である。

★新しい川柳の旗じるしを掲げている柳社にも、コレがはびこっているのだから驚く。稿料を貰わないからいいようなものの、これがプロの世界だったらドえらいことになる。

★今さら、〝来〟止めや〝居〟止めでもあるまいが、故路郎先生ご自身も使っておられたし、選句にもそれがあるから、ウチの句には〝来〟や〝居〟止めがまかり通っている。しかしコレを禁句にしている柳社もある。

★西日本新聞社東京支社の編集委員、小泉辰雄氏（号・戸牟）に会った。朝刊二十ページ以上という大新聞に〝現代の川柳・暮らしの百面相〟というコラムがある。氏はこれを担当しているが、新聞川柳にしてはじめてみるような秀句ぞろいに感心した。それもそのはず、氏は大正末期に路郎選を受けたことがあったそうである。

★路郎・虚乃先生の記事を書くため、わざわざ東京からこられたが川柳塔関係最近の句は〝秀句鑑賞と梅志句集〟などからも抜かれている。

★なお氏は現代の八大作家として、剣花坊、久良伎、三太郎、周魚雀郎、水府、路郎、紋太諸先生を挙げておられる。

★新年号から第五二四号と改める。「川柳雑誌」は四六〇号まで巨歩をしるした。「川柳塔」は謙虚に第一号から一歩ふみだしたが、虚乃先生のお許しを得て、川雑四六〇号の輝かしい記録を受け継ぐことになった。

★責任は重大である。第五二四号という家賃が払えるような句を作ることこそ、今われわれの双肩にかかっているのである。

★清水白柳（清）氏が心筋硬塞再発で急逝された。（別掲）　合掌。

（不二田一三夫）

コーヒーとミルクと私▼

牛乳の嫌いな私は喫茶店などでもコーヒーにミルクは入れない。兼ねて用意の小瓶へ入れて帰ります。

▼年のせいか肌の荒れを妨ぐ〝おんな〟のはかない抵抗からそのミルクを銭湯で使用します。ただし内湯では油が浮くので要注意です。

（小谷葉子）

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十五年十一月二十五日　印刷
昭和四十五年十二月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔　十二月号

定価　百八十円（送料六円）

タッチでえらべば
やっぱりサコム

サンヨー電子式卓上計算機
サコム
SACOM

見やすい設計　ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリー高級品
SANYO 三洋電機株式会社

国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

国際観光旅館
うおまたろう
魚又楼

風光明媚な
海岸美を
誇る

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3564